Okinawa Prefectural University of Arts

「島中おもろ」を読む

波照間　永吉

1．『おもろさうし』と「島中おもろ」について

『おもろさうし』の第18巻は「島中おもろ御さうし」の表題をもち、32篇のオモロを収録している。そのうち18-31・32番（通し番号1279・1280）の２篇を除く30篇が巻17の後半の「島中おもろのさうし」の詞書きをもって始まるオモロ群（17-1219から1248番オモロまで）と重複している。本稿では巻18のオモロを採り上げ、通釈と鑑賞および問題点について考えてみたいと思う。巻17のオモロを採り上げないのは、巻17が本来「恩納より上のおもろ御さうし」の表題を持つものであり、巻17後半の「島中おもろのさうし」は1710年の『おもろさうし』再編時に誤ってここに置かれたものとみられるからである。

本稿は1998年10月21日から12月23日まで10回にわたって行われた玉城村文化協会主催の講座「島中オモロを読む」のために作成したノートをもとにしている。そのため、島中オモロが謡われていた形の復元と通釈・鑑賞および問題点の提示に主眼を置いており、語釈についてはことさら細かな検討はしていない。この点をあらかじめお断りしておきたい。

本稿はまず島中おもろの原文を仲原善忠・外間守善編著『校本おもろさうし』（1965年　角川書店）の形によって示し、それが具体的に謡われていたであろうと考えられる形を復元して「復元形」と称して並べて掲げた。この、詞章の復元については玉城政美『南島歌謡論』（1993年　砂子屋書房）、拙稿「オモロ反復句索引〈末尾句引き〉」（『沖縄芸術の科学』第３号　1990年）、「オモロ反復句索引〈巻別〉」（『沖縄芸術の科学』第４号　1991年）、「『おもろさうし』の記載法―記載の省略とオモロの本文復元をめぐって―」（『文学』1989年11月号）他による。

語釈については主に沖縄古語大辞典編集委員会『沖縄古語大辞典』（1995年　角川書店）に拠ったが、私見を交えており必ずしもこれのとおりではない。用例の参照・摘出については仲原善忠・外間守善編著『おもろさうし辞典・総索引』

NII-Electronic Library Service

Okinawa Prefectural University of Arts

（第二版）（1995年　角川書店）に拠っている。

なお、諸本の校合については特に行っていない。また巻17・18両巻の重複オモロ間にみられる異同の詳細についてはすでに「重複オモロの実相」（『沖縄芸術の科学』第８号　1995年）で報告してあるので、本稿では繰り返さない。ご参照いただきたい。これらを総合した「島中オモロ」の注釈については別の機会にまちたい。

２．「島中おもろ」を読む

巻18－1249

〔原　文〕

さんことよたしかふし

一　みやくすく、こかねし、
　　ゆかる、こかねし、
　　こかねしに、こいや
又　ゑなふくに、のぼて、
　　てたが、まへ、のぼて、
又　かなかふと、こいや
　　かなよろい、こいや
又　あか、おとぢやの、三人
　　あか、おとぢやの、四人

〔復元形〕

一　宮城黄金子
　　良かる黄金子
　　黄金子に　こいや
又　稲福に　上て
　　太陽が前　上て
　　黄金子に　こいや
又　金兜　こいや
　　金鎧　こいや
　　黄金子に　こいや
又　吾が弟者の　三人
　　吾が弟者の　四人
　　黄金子に　こいや

〔逐語約・大意〕

１．宮城の黄金子は、立派な黄金子は＜黄金子にコイヤ＞
２．稲福に上って、領主様の前に上って＜黄金子にコイヤ＞
３．金兜をコイヤ、金鎧をコイヤ＜黄金子にコイヤ＞
４．吾が兄弟が三人、吾が兄弟が四人＜黄金子にコイヤ＞

宮城の黄金子、立派な黄金子と讃えられる人物が、領主のおられる稲福に上っ

NII-Electronic Library Service

Okinawa Prefectural University of Arts

ていく。そして、金兜・金鎧を戴き、それを身にまとう。領主と黄金子を取り巻いて、兄弟分たちが三人、四人と群れ集まる。そのような状景をうたったオモロ。

〔語　釈〕

みやくすく—大里村高宮城。「高究帳」に「島添大里間切宮城村」とある。のち、南風原間切宮城村が大里間切に編入されたので、これと区別するため「高宮城」と改称した（『角川日本地名大辞典　47　沖縄県』 1986年　角川書店。以下『地名辞典』と表記）。『琉球国由来記』（『定本　琉球国由来記』1997年　角川書店。以下『由来記』と表記）には「大里間切高宮城」とある。『由来記』には御嶽としてコガネ森がある。他の拝所に高宮城ノロ火の神、高宮城ノ殿がある。いずれも高宮城ノロの司祭する祭祀場である。『由来記』によると高宮城ノロは古堅・当間・仲程・平川・真境名・平良の各村の祭祀の司祭者でもあった。これからしても、この村の近隣村落間における位置がうかがえよう。

こがねし—黄金子。人名。本来は、男子に対する美称・尊称であったものが、ここでは「宮城の黄金子」と固有名詞化したと考える。オモロの用例はこのオモロと重複オモロのみ。

ゆかる—良かる。良き、立派な、素晴らしいの意。重複オモロでは「よかる」と表記。

ゑなふく—大里村稲福。初めは玉城間切に所属していたが、後に大里間切となった。伝承では佐敷の稲福大主が村建てしたとされる。現在、村の後方に稲福遺跡があるが、この遺跡からはグスク系土器、中国製の陶磁器・陶質性土器の他、勾玉・丸玉・胡州鏡などの装飾品、青銅製簪、刀子・釘・鏃・斧・釣針などの鉄製品、牛骨・炭化米・炭化麦などが出土した。中国製の輸入陶磁器は13世紀末から14世紀のもので、これらから、この遺跡を中心とした集落は12世紀から15世紀に形成されたらしい（『地名辞典』）。オモロにうたわれた稲福の村はこの村であったとみてよかろう。『由来記』に山城之嶽、上之嶽、中森、ハケ森と４つの御嶽と稲福之殿がある。大城ノロの祭祀するところであった。オモロに「いなふく」（17-1219・1220）、「ゑなふく」（17-1221、18-1249・1250・1251）の表記がある。

かなかぶと—金兜。兜の美称。立派な鎧。「かな」は具体的な材料を言っていると考えるよりも、兜をほめたたえるための語とみる。用例は13-767、17-1219=

NII-Electronic Library Service

Okinawa Prefectural University of Arts

18-1249、21-1446の４例。

かなよろい―金鎧。鎧の美称。立派な鎧。「かな」は上に同じ。用例は17-1219=18-1249、21-1446の３例。「よろい」の用例は2-60、7-380、14-1027。他に「あけのよろい」(1-5=3-123)、「あふくものよろい」(10-537)、「いとおどしのよろい」(15-1105)、「くろかわのよろい」(20-1334)、「まいとおどしのよろい」(15-1105) などと出る。いずれも舶来の貴重な武具であり、祭儀の装身具となっていたことを語っている。

おとぢや―弟者。弟・妹。兄・姉をシヌジャという。兄弟姉妹を総称してウトゥジャ、ウトゥジャンダ（おとじゃのた）とも言った。主として平民や婦女子が使う語（『沖縄語辞典』）という。『混集』（坤・人倫）に「おとちや　男女共兄弟を如斯申なり　他人も親切におもふ方はおとちやと俗に申なり」とある。『歌解』に「おとぢや　兄弟。同胞。思うに、おとぢやは、弟の事にて、しのぢや即ち兄に対する語ならん」とある。さらに『混集』（乾・人倫）に「おめとぢや　兄弟の事　おとちやむだとも云々」とある。

〔鑑賞・問題点〕

ここでは、宮城の黄金子が稲福の「太陽が前」に上って鎧・兜を戴き、身に着ける、と考えた。あるいは稲福の領主へ鎧・兜を差し出すのであろうか。これに対し、『地名辞典』は「宮城の貴人が黄金冑や黄金鎧の美しい装束で、部下なる人々を従えて、稲福の領主の前に行かれるとなり、宮城黄金子を讃美したオモロである」とする。これについては、オモロが叙事的歌謡であり、事柄の叙述は時間の経過に沿ってなされることからして、「稲福に上る」ことと「鎧・兜を身に着ける」こととが前後することになり、問題である。

鎧・兜をオモロはわりと採り上げる。これは舶来の武具の持つ社会的価値に由来するものとみられる。それは鉄を産しない沖縄における鉄製武具の重要性によるものであろう。舶来の武具は、政治的場面においては、権力者の富と勢力の象徴であり、宗教的な場面では王権守護の霊的力の象徴となっていると目される。鎧・兜を身にとりよろう人物は、ここのように男性もあるが、神女もそれをなす(1-5参照)。それは武装が宗教的な意味を持つものであることを我々に教えている。

NII-Electronic Library Service

Okinawa Prefectural University of Arts

巻18－1250

〔原　文〕

みやくすくこかねしかふし

一　さんこ、とゆだし、
　　ゆかる、とよだし、
　　てだきよら、まさるてた

又　大たうのまへに、
　　おとち、こいつめや、
　　てだきよら

又　ゑなふくの、はんた、
　　よりだちの、はんた

〔復元形〕

一　さんこ鳴響だ子
　　良かる鳴響だ子
　　太陽清ら　勝る太陽

又　大たうの　前に
　　おとちこいつめや
　　太陽清ら　勝る太陽

又　稲福の　切崖
　　寄り立ちの　切崖
　　太陽清ら　勝る太陽

〔逐語訳・大意〕

1．さんこの鳴り轟くお方、立派な鳴り轟くお方は＜美しい太陽なるお方、優れた領主様＞

2．ウフドウの前に、オトチコイツメは＜美しい太陽なるお方、優れた領主様＞

3．稲福の切り崖に、寄り立ちの切り崖に＜美しい太陽なるお方、優れた領主様＞

全体としては、「さんこ鳴響だ子・良かる鳴響だ子」なる人物と稲福の地を誉め称える内容のオモロと推測される。

〔語　訳〕

さんことゆだし—さんこ鳴響だ子。「さんこ」は語義未詳。美称辞（『沖縄古語大辞典』。以下『辞典』と略称）か。「おにさんこ」（17-1202）という語からすると、あるいは人名か。また対語の「ゆかるとよだし」（良かる鳴響だ子）とさらにその対語「ゑんことよたしゆ」（11-566他）の「ゑんこ」（善の子）からすると「良い・立派な」などの意を持った語かとも思われる。17-1220では「さんことよたし」。「とゆだし」の「し」は、後世、位階名となるシー（子）を考えているが（『辞典』）、過去の助動詞の連体形に接続する例はここのみであるから、「子」ではなく、形式名詞の「し」（人）か、あるいは「とよたしゆ（よ）」の「しゆ」（主）を考えるべきかもしれない。用例的にはこの方が多く、蓋然性としてはこちらが高いように思われる。ただ、「しゆ（よ）」（主）であれば、

NII-Electronic Library Service

Okinawa Prefectural University of Arts

こちらも助動詞の連体形に接続する形であり、これが認められるとすれば、「し」（子）も当然可能である。なお「とよた（だ）しゆ（よ）」が続く語形は「いやゝ～」「しろこ～」「まくし～」「よ（世）かる～」「ゑんこ～」などである。なお、稲福は鍛冶が盛んで、鍛冶職人が鬼と受け止められ、後に南山大里との地名とも絡みながら「大里鬼」の伝承を生むようになったのであろうか。このあたりの伝承を含め「さんことよだし」を鍛冶職人とする見方も可能性の一つとして記しておきたい。

大たう—大里村稲福内にある地名か。稲福に小字「大道原」がある（『地名辞典』）。玉城村字前川には大道原があり、ウフドージョー（又は、ウフジョードー）という小地名もある。原意は「大きな平坦地」。那覇にもウフドー（大道）がある。八重山の小字に「オオドウバル」（新川・大浜・白保・竹富）が、姓に「大道」「大堂」がある。

おとちこいつめ—神女の名。17-1220では「おとちこいつこ」。「おとち」は初代の聞得大君となった尚真のヲナリ（妹）の名ヲトチトノモイカネのヲトチ、久米島の神女「おとちこばら」の「おとち」と重なるものであろう。「こいつめ」は「こいつ・め」だろう。八重山のオヤケアカハチの妻となった女性の名はクイツバーで、これは「こいつ・はあ」（コイツ婆）である。オモロにも「みやこ　こいつ」「やゑま　こいつ」（11-645）とある。

はんた—切り崖（ぎし）。断崖。カヤウチバンタなど現在の地名にも「はんた」の名は多数残っている。ハンタバル・ハンタガワ・ハンタマシ・ハンタモウなど、ハンタを含む小字名は35地点もある（大城盛光『沖縄地名総集』）。オモロでは「あかはんた」（14-1033＝16-1167）、「い（ゑ）なふくのはんた」（17-1220＝本例）、「かわはんた」（11-571＝21-1422）、「ここはんた」（11-571）、「けおはんた」（8-415）、「よりだ（た）ちのはんた」（本例）と出る。

よりだち—寄り立ち。家や高倉などが多数寄り合って立つこと。12-677＝15-1104では対語は「たまよせ」（玉寄）。他に14-1048、16-1160などに用例がある。「きこゑよりたち」「とよむよりたち」（14-1049）の美称もある。具志頭の始まりとされる地を方言でユッタチジョーというが、これは「寄り立ち門」ということで、「寄り立ち」と集落の関係を暗示している。

NII-Electronic Library Service

Okinawa Prefectural University of Arts

〔鑑賞・問題点〕

第２節と第１節、第３節の意味的つながりがよくわからないために、全体の意味も分からなくなっている。「こいつめ」は神女名だが、「稲福の切り崖」とどう関わるかが大きな問題。

「よりたち」をうたう他のオモロからすると、ここも豊穣を讃える気持ちが底流しているとみることはできるだろう。高い崖の上から平地部を見下ろし、豊穣を予祝することは、他のオモロにしっかりとうたわれており（15-1103・1167)、ここもそのような儀礼を背景としたものとは考えられないだろうか。

巻18-1251

〔原　文〕

あさとおきておやみかまのふし

一　ゑなふくの、世、まさり、
　けらへて、ちよわちへ、
　みやかり、ほこりよわちへ
又　くにのねの　世まさり

〔復元形〕

一　稲福の　世勝り
　げらへて　ちよわちへ
　　見揚がり　誇りよわちへ
又　国の根の　世勝り
　げらへて　ちよわちへ
　　見揚がり　誇りよわちへ

〔逐語訳・大意〕

試案１

１．稲福の世勝りをお造りになっていらっしゃって＜見揚がり、御誇りなさって＞

２．国の根の世勝りをお造りになっていらっしゃって＜見揚がり、御誇りなさって＞

稲福の世勝りなる建物をお造りになった。それを見上げては誇り、喜んでおられるというオモロ、となる。

試案２

１．稲福の世勝りは、（見揚がりを）お造りになっていらっしゃって＜見揚がりを御誇りなさって＞

２．国の根の世勝りは、（見揚がりを）お造りになっていらっしゃって＜見揚がりを御誇りなさって＞

NII-Electronic Library Service

Okinawa Prefectural University of Arts

稲福の世勝りなる領主が、見揚がりの建物をお造りになった。それを世勝りは誇り、喜んでおられるというオモロ、となる。

〔語　釈〕

よまさり—世勝り。世に勝り優れたもの、が原意。試案１では建物の名としたが(『辞典』)、試案２では人名とした。オモロでは人名の例は、尚真王とされる「おきやかもひ」としてある。ただし、宮古の歌謡、また一般の命名で、男子の童名にユマサリがあるから、尚真に限定して考える必要はない。試案２では、稲福の領主の名とみたわけである。「世まさりかみや」(庭) (14-1050)、「世まさりのおき（ぎ）やか」(5-253・263)、「世まさりのおきやかもひ」(5-232)、連体形の形では「よ（世）まさるひやし」(17-1239=18-1269)、「世まさるしまうちひやし」(11-601＝21-1419)、「世まさるみやかり」(2-58) などの語形がある。

げらへて—作って。造営して。「げらへる」は、造営する。美しく作る。「けらへ」に対するオモロ原注に「佐事之事」とある。『混集』(乾・言語) に「けらいて　造営並調和の事也　おもろ御さうしに十尋とのけらいて八尋とのけらいてと有は造営の事　食物なとのけらいてという時は調和なり　又けらい言葉と云時は上へ慇懃に言葉をとり繕ひ物を申をいふ」とある。『南島八重垣』に「普請の古語なり。今尚、御殿ゲライルなどといふ。宮殿を建築する場合にいふことばなり」とある。また、酒を醸す・立派に執行する・料理することなどにもいう。八重山方言では立派な青年をギラムヌ・ギリャムヌという。15、6世紀の西表島の英雄「慶来慶田城」の「慶来」もギライで、立派な、偉大なの意。

ちよわちへ—いらっしゃいまして。おいでになって。「来おはして」が元の形。終止形は「ちよはる」。オモロにみられる他の語形は「ちよわい」「ちよわちへ」「ちよわちへからは（わ)」「ちよわちやれ」「ちよわちゑ」「ちよわは」「ちよわめ」「ちよわやれ」「ちよわより」「ちよわよる」「ちよわる」「ちよわれ」「ちよわれは」などで、用例多数（所出番号は割愛する)。

みやかり—見揚がり。試案１では「見揚げて」と解釈した。これは「よまさり」を建物とする『辞典』の立場に立つと、「みあがり」を建物とすると「よまさり」と「みあがり」の関係が分らなくなるからである。試案２で建物の名(『辞典』) と解釈したのは、「よまさり」を人名とした結果である。

NII-Electronic Library Service

Okinawa Prefectural University of Arts

ほこりよわちへ—御誇りなさって。「ほこる」の連用形「ほこり」に補助動詞「おはす」の接続形「おはちへ」が付いた形。「ほこる」は、喜ぶ、祝福する、誇らしく思う、得意に思う、の意。オモロ原注に「慶の事」(6-291) とある。「ほこりころがま」の形では「ほこり」は美称辞的（優れたの意を表している）に機能している。オモロにみられる他の語形は「ほこて」「ほこてから」「ほこてす」「ほこて〴〵」「ほこよる」「ほこら」「ほこらしや」「ほこられて」「ほこり」「ほこりころかま」「ほこりほしや」「ほこりやべら」「ほこりよら」「ほこりよわちへ（ゑ）」「ほこる（ろ）」「ほこるてゝ」「ほこれ」などで、用例多数（所出番号は割愛する）。ちなみに、八重山方言で「有難う」（目下・同輩に対して）をフコーラサと言い、与那国方言ではプガラッサと言う。これも相手の行為によって「誇らしい」気持にされたことが語の源泉となっている。首里城外郭の第二門・久慶門の沖縄風の呼称ウブクイウジョーのウブクイは「御誇り」で、漢語式の呼称の「久慶」の「慶」と見事に一致・対応している。

くにのね—国の根。国の根にあたる所、の意で、自分たちの地を誉め称えた名称。国の中心。用例は14-1048、2-53、13-903、18-1253・1262・1265、19-1330、6-344。「あらかきのくにのね」(2-63。対語は「てにつぎのしまのね」)、「とよむくにのね」(2-53。対語は「中城根国」）などの語形もある。「くにね」(17-1223＝大城、17-1232・1235＝玉城）に同じ。「ねくに」「ねのしま」といった表現との異同についても考えてみるべきだろう。

〔鑑賞・問題点〕

試案１・２と、異なった解釈が出来ることを示した。いずれとも決定できないが、強いていえば、今は試案２の方がすわりはよいように思う。

試案１・２ともに稲福の土地誉めであることにかわりはない。素晴らしい建物を建造した喜び、誇らしさをうたうことに主眼はある。稲福のかつての繁栄をしのばせるオモロといえる。稲福遺跡の存在はその歴史を証明するものであろう。ただ、近世期の史料にみえる稲福は必ずしも豊かではないようにみえる。これとオモロ時代のズレをどのように整合的に理解するかは、オモロというものの性格を考えることにつながってくるかもしれない。

NII-Electronic Library Service

Okinawa Prefectural University of Arts

巻18-1252

〔原　文〕

うらおそいおもろのふし

一　たかかわの、みづは
よこす、物やてや、
ぬきやけ、みづ、
かいなで、みづせまし

又　おやかわのみつは、よこす

〔復元形〕

一　高井戸の　水は
寄越す物　やてや
貫き上げ水
掻い撫で水 せまし

又　親井戸の　水は
寄越す物 やてや
貫き上げ水
掻い撫で水 せまし

〔逐語訳・大意〕

1．高井戸の水は、寄越す物であるから＜貫き上げ水、掻き撫で水にしようよ＞
2．親井戸の水は、寄越す物であるから＜貫き上げ水、掻き撫で水にしようよ＞

村内にある井戸を褒め讃えたオモロ。「高井戸・親井戸」の水は水源から引いてきた水であるから、その水は領主様へ（あるいは、神へ）差し上げる水にし、また若返りの孵で水にしようよ、というオモロ。

〔語　釈〕

たかかわ—高井戸。井戸の立地、あるいは形態によ名称であろうか。『辞典』には「川の水を引き井堰を高くした井泉」とある。「川」というが、必ずしも川にこだわる必要はないだろう。泉の湧き口から水を引いてくるということぐらいに解釈しておきたい。また、「井堰を高くした」とあるのも、立地による名称であれば、訂正の必要がある。湧上元雄先生は、大里村字稲福の石灰岩台地の切崖にある洞穴泉である、マエカーとウチガーの二つがここの「たかかわ」と関わりがあるか、としておられる。

よこす物—寄越す物。引き導いてくる物。「よこすもの」の例は本例と重複オモロのみ。「よこす」は、引き導く、誘導する、誘惑するの意。ここは水を引くこと。琉歌に「はんた前の下り　溝わてどよこす 三十ませ三ませ　真水こめて」（全56）とある。誘惑する意では「円覚寺御門の　鬼仏がなし 我無蔵よこしゆすや　おどちたばうれ」（全758）がある。また、「騙す」意の「よこす」

NII-Electronic Library Service

Okinawa Prefectural University of Arts

はオモロ3-96に「又　あからせぢ　おるちへ/まへほしやよ　まよわちへ／又　ひぢゑるせぢ　おるちへ／おかすきやよ　ゆこちへ」（赤いセヂを降ろして前坊主の者共を迷わし／冷めたいセヂを降ろして邪な者共を騙し）とある。

ぬきやけみつ—貫き上げ水。貴人に差し上げる水。「ぬきあげる」は、高く揚げる、の意。オモロでは豊穣のシンボルである神酒を高々と掲げることに言うのが多い。「ぬきあけ」「ぬきあけて」「ぬきあけは」「ぬきあけれ」「ぬきあけわちへ」「ぬきやげて」「ぬきやげは」などと出るが、1-39「又　みよたちやは　ぬきあけて／よおたちやは　おしあけて」、3-97「まさけなよ　ぬきやげて」、5-242「ほうばな　とて　ぬきあげは」の事例は特殊である。

かいなでみづ—掻き撫で水。水撫でに用いる水。若水。スデ水。スデ水は、これで身を撫で、清めると、その人の身体を若返らせ、再生させると信じられた水。日本古代の信仰に見られる「をちみず」と共通する考えである（万葉3245「天橋も長くもがも　高山も高くもがも　月よみのもてる変若水　い取り来て　君に奉りて　変若得てしかも」）。ニコライ・ネフスキー『月と不死』参照。

せまし—しよう。したいものだ。動詞「す」の未然形に願望の助動詞「まし」の付いた形。2例（重複含む）のみ。助動詞「まし」のつく語形は、「あらまし」「おらまし」「しめまし」「すへまし」「せまし」「ぬはまし」「のばまし」などがある。

おやかわ—親井戸。村の親とも頼む井戸の意で、井戸を褒め讃えた呼称。沖縄各地に「おやかわ」がある（例—与那原親川：『由来記』13-56・58、古宇利親川：『由来記』15-168）。

〔鑑賞・問題点〕

村の親となる井戸・高井戸を褒め讃えたオモロであることは明らかである。その水を汲み、領主（あるいは神女（カミ））へ捧げるというのである。捧げられた水は、「掻き撫で水」として、領主に若返りをもたらし、永遠の生命を付与することになる。もし、その水が神女（カミ）に対して差し上げられたのであれば、命の水をもたらした神に感謝し、その恩恵をスデ水として受けることをうたうということになろうか。大折目祭祀に神女が聖なる井戸の水を浴びることは『由来記』15-168にみえる。サヤハ御嶽の水は麦の穂祭りの3日前、稲の穂祭りに首里殿内の火の神に捧げられたし（その後国王、開得大君、司雲上按司が水撫でした）、崎山樋川で

NII-Electronic Library Service

Okinawa Prefectural University of Arts

首里大アモシラレは水撫でをしている。『由来記』14-13でも聞得大君がヱボシ井戸で水撫ですることが記されている。もっとも、国王へ聖なる水を献上することは、王府の重要な儀礼で「辺戸之御水且吉方御水献上」があった（『由来記』1-3)。

18-1253

〔原　文〕

きこへきみかなしおそてそろへわちへかふし

一　大くすく、おわる、
　世かけにせ、あちの、
　みちや、づれが、み物
又　くにのねに、おわる
又　いとかずの、つかい、
　ねくにの、つかい

〔復元形〕

一　大城　おわる
　世掛けにせ按司の
　　御駄連れが　見物
又　国の根に　おわる
　世掛けにせ按司の
　　御駄連れが　見物
又　糸数の　使い
　根国の　使い
　　御駄連れが　見物

〔逐語訳・大意〕

1．大城にいらっしゃる、この世界を支配されるお方である按司様が＜馬を連ねる行列の見事さよ＞

2．国の根なる大城にいらっしゃる、この世界を支配されるお方である按司様が＜馬を連ねる行列の見事さよ＞

3．糸数からの招きで、根国からの招きで＜馬を連ねる行列の見事さよ＞

大城の按司が、糸数からの招きに応じて出向くのであろう。馬を連ね、部下を従えて行列が進む。その見事さを讃えたオモロである。

〔語　釈〕

おおくすく―大里村大城。大城グスクがある。大城グスクは、玉城の大城按司が築城したと伝えらえる。標高147メートルに位置する。大城グスクは当地一帯を支配していた大城按司の居城であるが、「麻姓家譜」によると大城按司は長男で、玉城按司は次男、糸数按司は三男とされる。大城按司は島添大里按司との戦いに敗れ稲福で自刃。その妻子は玉城を経て那覇の真和志間切儀間に逃れ、これから「真」を名乗り頭とする麻氏が始まったとされる。グスク遺跡からは

NII-Electronic Library Service

Okinawa Prefectural University of Arts

土器・輸入陶磁器・鉄刀子・鉄剣などが出ている（『地名辞典』）。『由来記』にはグスク内にヤラザ嶽があり、村に大城之嶽がある。大城ノロの司祭する祭祀場である。

おわる—いらっしゃる。「いる」「くる」の尊敬動詞。八重山方言ではオールンの形で、オモロ語そのままの意味で現在も使われている。

世かけにせあち—世掛けにせ按司。「よ」は、「世」で、社会・世界の意。「かける」は、支配する・守護するの意。「にせ」は原意未詳の接尾敬称辞。～様の意。「にせとの」（ニセ殿）、「おそいにせあんしおそい」（襲いニセ按司襲い）、「おとくにせ」（男ニセ）、「ふくりにせ」（誇りニセ）、「よかけにせすへ」（世掛けニセ末）、「よかけにせさ」（世掛けニセサ）、「わうにせ」（王ニセ）、「わうにせてた」（王ニセ太陽）、「ゑいにせ」（吉いニセ）、「ゑくかにせ」（男ニセ）等の語形がある。方言で青年をいうニーセーとは別語。

みちやづれ—御駄連れ。用例は本例と重複オモロのみ。「ちや」はヂャで、「だ」（駄。馬のこと）の口蓋化したもの。「御駄連れ」は馬を並べ連ねていくこと。「みちや」を含むオモロ語には「みちやひき」（御駄引き。14-986）、「みちやふれ」（御駄群れ。13-936）がある。

み物—見物。見るに値する物。見事な物・事。現代方言のミームン（見もの。見ておもしろいもの。『沖縄語辞典』参照）と重なっている。

いとかず—玉城村糸数。方言でイチカジ。沖縄本島南部を流れる雄樋川上流域に位置し、糸数グスクがある。糸数グスクは標高約180メートルの高地にある。この城は玉城按司の三男が糸数按司に任じられて築いたとされる。三山鼎立時代に南山の首里に対する拠点となっていたという。城内遺跡からはグスク系土器を中心に中国製青磁・白磁、鉄製鏃、刀子、石斧、貝製品、骨製品などが出土する他、炭化米・麦、牛骨などが出土している。これからみて、かなりの勢力を有し、稲作農耕が行われていたことが知られる。グスクは現在、国指定史跡。糸数村はササン・クルク・イトゥカジ・メーバル・シキナ・アダングチ・ヤカンなどの小集落が結合してできたとみられている。近世期には玉城間切で最高の石高を誇る村であった（『地名辞典』参照）。『由来記』に祭祀場として糸数城之嶽、糸数之殿が挙げられている。糸数グスクおよび、糸数の按司については18-1275～1277にもうたわれている。

NII-Electronic Library Service

Okinawa Prefectural University of Arts

つかい―使い。「つかひ」は「使い」で、御招待、御招きの意となる。現在の方言でも、「ʔuNçikee（名）　御招待。お招き。また、御案内。御同行。おつれすること。貴人に対しては、さらに上の敬語 nuNçikee を用いる」（『沖縄語辞典』）。八重山方言では「貴き人を招くこと。使しの義」で tsɨkaisɨ があり、「迎日、旧七月十三日即ち盆祭の迎への日を」tsɨkaisɨ-piŋ という（『八重山語彙』）。

ただ、オモロ語の「つかひ」の解釈が難しいのは、「お招き」するのか、「お招き」されるのかが明らかな形になっていないためであり、さらには、日本語の「使い」の意味が皆無ではないと思われるからである。

オモロ語の「つかひ」は大多数の用例が対語をもたない。しかし、次に示すように対語を有する例もある。参考までに記す。

又　つかい　ありては
　　いちやわり　ありては
　　(12-699)

又　きみいきよい　このめ
　　ぬしつかい　このめ
　　(12-694)

又　きみいきよい　けにあれ
　　かみつかい　たにあれ
　　(12-740)

一　きたたん世のぬし
　　（中略）

又　そゝへのつかい
　　(15-1108、1109)

〔鑑賞・問題点〕

糸数と大城との関係が焦点となる。ここでは糸数の按司の招きを受けて、大城の按司が配下の者を従え馬を連ねて行列していく、と考えた。糸数グスクの規模や大城グスクの造営伝承から、大城按司が本貫の地である玉城の糸数へ出向くと見て良いだろうか。「見物」と讃えているのは、第一には、大城按司の支配下の民衆であろう。

NII-Electronic Library Service

Okinawa Prefectural University of Arts

なお、大城から糸数への最短のルートはアジンビラの道で、船越の近くを通る。この坂道を糸数方面ではチンシビラと言っている。

18-1254

〔原　文〕

あおりやへかふし

一　大くすく、おやいくさ、
　　ちやくに、とよみいくさ、
　　みちへど、み、あぐも
又　くにのねの、おや、いくさ、

〔復元形〕

一　大城親軍
　　大国鳴響み軍
　　見ちへど　見あぐも
又　国の根の親軍
　　大国鳴響み軍
　　見ちへど　見あぐも

〔逐語訳・大意〕

1．大城の大なる軍勢<大国にその名の轟く軍勢は、見てぞ、更に見たいと思うのだ>

2．国の根なる大城の大なる軍勢<大国にその名の轟く軍勢は、見てぞ、更に見たいと思うのだ>

大城の軍勢・軍事力を讃えたオモロ。大城の軍事力が大国中に鳴り轟き、その勇壮さは、幾たび見ても見飽きることはない、というのである。

〔語　釈〕

おやいくさ—親軍。「おや」は尊敬・美称の接頭辞。ここでは、強大である、偉大であるの意味に解した。「いくさ」は、戦争・戦闘そのものもいう（「おおひらのいくさ」3-103）が、オモロでは「せいくさ」（精軍）、「きかれいくさ」（聞かれ軍）、「はちめいくさ」（初め軍）、「やまとのいくさ」（大和の軍）、「やしろのいくさ」（山城の軍）など、軍勢の意の用例が多い。

みちへど—見てぞ。「ど」は強意・強調の係り助詞。この助詞は「命ドゥ宝」などと、今でも勢いを失っていない。

みあぐも—見あぐむ。「あぐも」は「あぐむ」で、待ち望むの意を表すから、「みあぐも」は、見たいと思う、の意。14-982の「あぐでおちやる　こちやくち」は、通説では「開けようとして、開けあぐねていた」と解され、琉歌「伊計離

NII-Electronic Library Service

Okinawa Prefectural University of Arts

嫁や　なりぼしややあすが　犬名川の水の　汲みのあぐで」（全871）では、水を汲みあぐむ、うまく水汲みすることができないと解されている。「あぐむ」は日本語の「あぐむ」と同意を表している。

〔鑑賞・問題点〕

「みちへど　みあぐも」が最大の讃辞として使われている。見ても見ても見飽きることがない、とうたうことが讃辞となることは、「みれともあかん　しよりおやくに」（3-125）、「みれともあかん　てた」（14-1178）、「めつらしやあかんしよりおやくに」（7-390）などの例からもわかる。オモロは「みもの」「みるめ」「めつらしや」など、視覚に訴えることで対象を賞賛することを方法としていることがわかる。この問題については、比嘉実「花風前史—視覚の呪術的意味の変遷—」（『古琉球の世界』1982年　三一書房）がすでにふれている。ご参照いただきたい。

18-1255

〔原　文〕

あおりやへかふし

一　きこへ大くすく、
　　み、あがる、ちやう、たてゝ、
　　しげち、もちよせて、
又　とよむ大くすく

〔復元形〕

一　聞こへ大城
　　見揚がる門　建てて
　　しげち　持ち寄せて
又　鳴響む大城
　　見揚がる門　建てて
　　しげち　持ち寄せて

〔逐語訳・大意〕

1．世に聞こえた大城は、立派な門を建てて＜シゲチを持ち寄せて＞
2．世に鳴り轟いた大城は、立派な門を建てて＜シゲチを持ち寄せて＞

その名が世に聞こえた大城が、立派な門を造営し、神酒を持ち寄せて祝うさまのすばらしさよ、と大城を讃えたオモロ。

〔語　釈〕

みあがる—見揚がる。見て揚がる。「（霊力や精気が）揚がる。勝れる。」（『辞典』）。これの語幹が独立して美術辞として用いられたのが「みやが」（見て揚がる、

NII-Electronic Library Service

Okinawa Prefectural University of Arts

立派な）がある。「みやが」のつく語には「みやがのひやし」（見揚がの拍子）、「みやがのとまり」（見揚がの泊）、「みやがのもり」（見揚がの杜）、「みやがのとり」（見揚がの鳥）、「みやがのわし」（見揚がの鷹）などである。他の語形に「みあがやり」（見揚がのやり）、「みやがり」（見揚がり。神女名・場所名・建物名）、「みあがるちやう」（本例。重複と合わせて２例）、古謡語の「みあげもり」（見揚げ杜）などがある。他動詞「みあげる」（見揚げる）の用例もある。

ちやう―門。現代の沖縄方言でもジョーという。ジョーには門の他、門前の通り、道の意もある（アヤジョー＝綾なる道、クファングヮジョー＝古波蔵通りなど）。八重山方言ではゾーという。

しげち―神酒。元の形は「しげき」。「しけ」は聖なるの意で、「き」は酒のこと。オモロ原注に「神酒なり」（8-448）とある。『混集』（坤・飲食）に「しげち酒之事」とある。オモロでの用例は８-448、11-643、12-671、13-962、14-1025、15-1069、15-1092、15-1119、17-1225、18-1255。「たれしけち」（垂れシゲチ。17-1180）もある。「しけちなは」（シゲチナハ。9-498=16-1159）、「しけちもり（シゲチ杜。16-1161）は土地・聖地を美称する用例とみられる。なお、後者は「シゲチ盛り」（神酒盛り）とも解されるかもしれない。「なつは、しけち、もる／ふよは、御さけ、もる」とうたった15-1069番オモロは、琉歌では「英祖のいくさもり　夏すぎて冬や　お酒もてよらて　遊びめしやうち」（全1623）と翻案されている。

〔鑑賞・問題点〕

大城を讃美したオモロである。大城が城門を造営したことをうたうことによって、大城グスクを讃美しているのである。グスクを讃美することは、同時に按司を讃美し、その土地を讃美することにつながっていく。これが「しげち　持ち寄せて」という表現によって表されている。酒は豊饒のシンボルであり、富そのものであったから、これを「持ち寄せ」る大城は勝れた土地ということになる。

門の造営をうたうことによってグスク・土地をたたえるのはオモロの表現の一つの類型と言えるかもしれない。巻２-42の「一　聞こゑ中城／東方に向かて／板門　建て直ちへ／大国　襲う　中城／又　鳴響む中城／てだが穴に　向かて」というオモロをその代表例とすることができるであろう。

また、このことは「いしちやう」（石門）、「おやちやう」（親門）、「かなちやう」

NII-Electronic Library Service

Okinawa Prefectural University of Arts

(全門)、「あまへのちやう」(歓えの門)、「すへのちやう」(精の門)、「みあかるちやう」(見揚がる門) などという、門を讃えた表現などからもみてとれるだろう。

酒が豊饒のシンボルであることは上にもふれたが、オモロはこのことを繰り返しうたっている。酒を意味する古語については下記参照。酒と城門とを同時にうたいこんだオモロに14-1050番オモロがある。

酒を意味する語

1. シゲチ (シゲキの転か) ・タレシゲチ (タレは醸の義)
2. ミキ・ミイキ・ミキイ・イミキ・オミキ・マミキ・タレマミキ・タルマミキ・白マミキ・祭りミキ・ノマイミキ・アハミキ・麦御祭・キミミキ (黍御酒・ヨミキ・大ミキ・芋御酒・ハンスイモ御酒)
3. サケ・オザケ・カラザケ (泡盛に云う) ・カラダケ (同上) ・チゝダケ (シチザケの転。節目の酒の義で、神酒のこと)、アマオザケ (醴。冬至・元日・其他の祭礼に城中で用いたもの。これには其家あり、嫡子相伝で、次男以下は製法を知らなかったと云ふ。) ・ヨザケ・ナデス酒 (桑酒) ・ケモゝザケ・唐の黍酒 (玉蜀黍酒)
4. シドキャ (粢の転か)
5. サク・シャク・ミシャク・ミシャグ・オミシャク・オムシャク (上の語の転で、御神酒の事。ムシャク、ミキとも云ひ、俗には、カンオンシャクと云ふ。カンは嚼・オンサク
6. カメン・ガメンコ (シドキャの対語)
7. アマコタレ・シラコタレ・ホタレ (穂醸)
8. シルマシ・オシルマシ・シルマシイ・シラマシイ・ガメンシルマシ
9. ノマイ物 (ノマイミキの同義語で、シルマシの事)
10. ゼン・マゼン・ゼン御酒・ゼニ・ゼニタマリ・ゼノ・ジン酒
11. アハモリ・アハリ酒 (この二語は宮古八重山の民謡に出てゐる) ・粟マモリ・米マモリ
12. オクスリ (御薬)
13. シロヒツキ (タルマミキの対語。沖縄県の北端奥の神唄に見ゆ)
14. ヱノチカミ (養命の神の義かそれとも元気をつける神の義か)

NII-Electronic Library Service

Okinawa Prefectural University of Arts

15. 黍酒（バーチウ）・味醂酒（ミーリンチウ）・焼酒

以上の15系67種がある。伊波普猷「沖縄考」（『全集』第４巻P363～364）より作成。

18-1256

〔原　文〕

わなのおもやこかふし

一　おたこ、なつらしや、
　　あさと、しなて、かなて、
　　あんしに、おもわれゝ
又　わなの、あら、かない
又　ひやくな、はつ、かない
　　あさと、しなて、かなて

〔復元形〕

一　おたこ　なつらしや
　　アサと　撓て　適合て
　　按司に　思われれ
又　和名の　新貢
　　アサと　撓て　適合て
　　按司に　思われれ
又　百名　初貢
　　アサと　撓て　適合て
　　按司に　思われれ

〔逐語訳・大意〕

1．オタ子のナツラシは<父なる方と撓い、和合して、按司様に思われよ>
2．和名の新物の貢ぎ物が<父なる方と撓い、和合して、按司様に思われよ>
3．百名の初物の貢ぎ物が<父なる方と撓い、和合して、按司様に思われよ>

オタ子のナツラシよ、父なるお方と麗しい関係を保ち、按司様に大切に思われよ。和名から新穀の貢ぎ物が上ってくる、百名から初物の貢ぎ物が差し上げられてくる、父なるお方と麗しい関係を保ち、按司様に大切に思われよ、というオモロ。「おたこなつらしや」の意は不分明だが、ここでは人名ととった。あるいは別解が可能かもしれない。全体の意味ははっきりしない。

〔語　釈〕

おたこ―人名であろう。オタ子か。本例のみ。重複オモロ17-1226では「おもこ」。「おもこ」にしてもよく分らない。「思い子」なら、「い」の音が誤脱したことになる。

なつらしや―『辞典』は人名とする。あるいは形容詞「なつらしや」も考えられ

NII-Electronic Library Service

Okinawa Prefectural University of Arts

るか。それにしても意味は未詳である。誤写説を考えるとすれば「めつらしや」なども考えられる。重複と合わせて２例のみ。

あさ—父。オモロでは親の同義語であり、集落の長老、一般から尊敬されている男の呼称。族長的性格を持つ存在で、後に政治的支配者として成長し、按司のこともいうようになる。宮古・八重山方言のアザ、アジャ（兄）、アッチャ（父）、奄美方言アサ（父）などと関係のある語とみられる。

しなて—撓て。動詞「撓う」の接続形。「しなう」は調和・和合する、の意。オモロ原注に「和睦之事也」(19-1299) とある。『混集』（坤・言語）に「しなて　合て叶てと云事」とある。外間守善「向かうかたしなて—調和の心—」（『南島の神歌』1994年　中央公論社刊）参照。

かなて—叶て。適合して。動詞「かなう」の接続形。沖縄古語では「かなう」には他に、実現する、達成する。～できる、～に勝つことができる。達者である、しっかりする、の意がある。「かなであんしおそい」の例が３-95、「かなてあんしに　おもわれて」の例が15-1100にあるがこれをどうみるか。前者は「掻い撫で按司」とみるのが一般的であるが、後者については、本例と同様に「叶て按司に思われて」とみることも考えるべきだろう。

わな—地名。和名。玉城村垣花の内。近世期は玉城間切和名村。垣花村の人をワナンチュ（和名人)、垣花グスクをワナグスク（和名城)、垣花ヒージャーをワナヒージャー（和名樋川）と称したという。「高究帳」に「わな村」とある。『由来記』に和名ノロ、和名之殿がある。『由来記』によると和名ノロは「中森」「上里森」「大森」「中森」「和名巫火神」「当間之殿」「和名之殿」「上間之殿」での祭祀を主宰・執行した。

あらかない—新貢。「あら」は新しい、新物である、の意。「かない」は貢物。税として納める物。貢納物。対語は「ささげ」。沖縄方言でカネー。手伝いを意味する方言ティガネーもこれからきた語。本例のみ。重複オモロ17-1226では「あしかかない」だが、「あらかない」の形がよい。

ひやくな—玉城村百名。南方１キロ余に海岸線を持つ。この海岸からリーフに向かって「あきみよ」（明け澪。13-872、19-1315。方言名アチヌー。）が伸びている。また海岸部にはヤハラヅカサ、浜川御嶽、ウキンジュ・ハインジュ（受水・走水)、ミフーダー（御穂田)、「やぶさつのうらはる」（藪薩の浦原。13-

NII-Electronic Library Service

Okinawa Prefectural University of Arts

872、19-1315）などの聖地がある。いずれもアマミキョ神話に代表される沖縄における稲作発祥の神話と関わりのある聖地である。『中山世鑑』や『由来記』にみられる国王の知念・玉城行幸の聖地であり、現在もアガリウマーイ（東方巡拝）の地となっている。

はつかない―初貢。初の貢物。今年収穫し最初に差し上せる穀物のこと。特に、お初として捧げる貢物を言うと思われる。13-955に「又　聞こゑ按司襲いぎや／鳴響む按司襲いぎや／又　浦貢　寄せて／初貢　寄せて」とある。これと合わせて２例のみ。

〔鑑賞・問題点〕

「おたこ」「なつらしや」の意味がよく分らないため、全体の意味もまた分らない。仮に『辞典』が言うように両語とも人名であった場合、この両者の関係はどのようなものか、これまた問題となろう。「なつらしや」が「めつらしや」のような形容詞であれば、「オタ子の珍しさよ」となり、そのオタ子を中心にして解釈が進められる。例えば、オタ子が和名や百名の新貢・初貢を宰領し、按司に上せる。そして、オタ子は地域の父なるお方とも和合し、そして按司からもたのもしく思われ籠愛されるようになる、と言う具合に。この場合、オタ子を予祝・讃美したオモロと解釈するわけである。「おたこ」「なつらしや」の解釈が鍵を握っている。

18-1257

〔原　文〕

いつかなつたゝしよかふし

一　ひやくなわ、うらばゑ、ふけは、
　　あおりやへ、なさ、まぶりよわちへ
又　わかうらは、うらばへ、ふけは、
又　おれつむ、けもりやか、たては

〔復元形〕

一　百名わ　浦南風　吹けば
　　あおりやへ　なさ
　　守りよわちへ
又　吾が浦は　浦南風　吹けば
　　あおりやへ　なさ
　　守りよわちへ
又　おれづむ　煙やが　立てば
　　あおりやへ　なさ

NII-Electronic Library Service

Okinawa Prefectural University of Arts

守りよわちへ

〔逐語訳・大意〕

1．百名は浦南風が吹くと＜アオリヤエ神様は父なるお方をお守りなさって＞

2．吾が浦は浦南風が吹くと＜アオリヤエ神様は父なるお方をお守りなさって＞

3．ウリズンの煙・霞が立つと＜アオリヤエ神様は父なるお方をお守りなさって＞

百名の村・吾が浦に南風が吹き出す。ウリズンの霞が立ち上る。アオリヤエ神は領主様をお守りなさるといって現れている、というオモロ。

〔語　釈〕

うらばゑ—浦南風。浦に吹く南風。重複オモロと合わせて２例のみ。「うらしろ」という語もある。

ふけば—吹けば。動詞「ふく」の已然形に接続助詞「ば」の付いた形。用例は9-510、13-892、17-1227・1228、18-1257・1258、21-1404・1441など。

まぶりよわちへ—守りたまいて。守護なさって。動詞「まもる」の連用形に尊敬の補助動詞「よわす」の接続形「よわちへ」の付いた形。用例多数。

おれつむ—旧暦２・３月頃の季節。『混集』（乾・時候）に「わかおれつみ　二三月麦の穂出る比を云」とある。対語「わかなつ」。「おれつむ」の用例は２-54、７-349、13-925・981、17-1227、18-1257＝19-1287、22-1544、「おれつも」の用例は14-994。沖縄方言でウリジン。八重山方言でウリィジィン。宮古方言ではビュージィン。

けもりや—煙。「けむり」に、～する者・物の意を表す接尾語「や」の付いた語。ここでは、ウリズンの頃に立つ霞を言うのであろう。重複オモロと合わせて２例のみ。「けむり」は古謡語では家を表す語として使われる。琉歌・組踊語としては煙そのもの（全2921）の意の他、もやもやと立ち上る不安の比喩的表現（組・忠士108）としても使われる（『辞典』）。

たてば—立てば。立つと。動詞「たつ」の已然形に接続助詞「ば」の付いた形。用例多数。

〔鑑賞・問題点〕

冬が終わり、ウリズンの季節となる。風も北風から南風に変わり、野には春霞が立ち、心地よい日となっていく。そのような心の浮き立つ季節の情景であるが、オモロはそれを叙景歌的にうたうのではない。祈りの文学としてあるオモロは

NII-Electronic Library Service

Okinawa Prefectural University of Arts

「あおりやへ　なさ　守りよわちへ」と神を登場させるのである。ウリズンと神事をうたったオモロに7-349、13-925がある。また、19-1287はウリズンの季節に貢物を捧げることをうたっている。

18-1258

〔原　文〕

うらしろたちよいふし

一　ひやくな、うらしろ、ふけは、
　うら〜と、わかきみ、つかい
又　わかうらは、うらしろ、ふけは
又　てかすは、こば、はなさきよら
又　かひやるは、なみはな、さきよら

〔復元形〕

一　百名　浦白風　吹けば
　うらうらと　若君　使い
又　吾が浦は　浦白風　吹けば
　うらうらと　若君　使い
又　手数は　蒲葵花　咲きよら
　うらうらと　若君　使い
又　櫂遣るは　波花　咲きよら
　うらうらと　若君　使い

〔逐語訳・大意〕

1．百名に浦白風が吹くと<うらうらと若君様をお迎えに>
2．吾が浦に浦白風が吹くと<うらうらと若君様をお迎えに>
3．漕ぐ度毎に櫂の先には蒲葵の花が咲くのだろう<うらうらと若君様をお迎えに>
4．櫂を遣る先には波の花が咲くのだろう<うらうらと若君様をお迎えに>

百名の吾が浦に浦白風が吹き出すと、若君様のお迎えの舟が出る。その浦を走る舟には、舟子が櫂を一漕ぎする度毎に、白い波の花が咲きこぼれていることだろう、というオモロ。

〔語　釈〕

うらしろ—浦白風。白南風。梅雨明けの頃吹く南風。「梅雨入りの頃の南風が『あらはえ』で、半ばが『くろばえ』、明けが『しろはえ』というのだろう」(池宮正治「白い風と蒲葵の花」『おもろさうし精華抄』1987年　ひるぎ社刊参照)。徳之島方言にシルバイ、クルバイ、アラベェーがある（池宮「同上」)。

うら〜と—のどかなさま。のどかに。オモロ原注に「座敷の愛藝（ケウ）しと

NII-Electronic Library Service

Okinawa Prefectural University of Arts

云」とある。『混集』（坤・言語）に「うらうらと　風のどかに吹事也　所によりて愛寵の心にも叶ひり」また「うらうらァと　和調にも有呉竹集に和日と書　春の季也　長閑なる体なり云々」とある（『辞典』）。

わかきみ—若君。神女の名称と考えた。あるいは「吾が君」かもしれない。池宮氏は「船の美称（中略）生命力豊かな神女の祝福を受けた船の意の美称と思われる」（池宮「同上」参照）とするが如何。

つかい—オモロ語の「つかい」には、招待、ご案内、使いの意味がある（前述参照）。ここは招待ととった。池宮氏の解釈では、使いの意となる。

てかず—手数。船を漕ぐ度毎、の意。あるいは、漕ぎ手毎にの意かもしれない。重複と合わせて２例のみ。

こばはな—蒲葵の花。白色系の花を５・６月頃に咲かせる。クバが聖樹であることは先学が既に指摘している（柳田国男「阿遅麻佐の島」『海南小記』所収。池宮「同上」他参照）のでくりかえさないが、『由来記』記載の御嶽名や御嶽の神名にクバ、コバ、フボーの名を負ったものが多数みられるのはそのあらわれである。

さきよら—咲き居ら。咲いて居るだろう。動詞「咲く」の連用形に補助動詞「おる」の未然形「おら」が付いた「さきおら」が口蓋化したもの。他の語形に「さきよれば」（咲き居れば。４-159、13-822・845・977）がある。

かひやる—かい遣る。「櫂遣る」（池宮「同上」）か、あるいは「掻き遣る」の音便化したものか（『おもろさうし辞典・総策引』）。具体的には、櫂を掻き遣る動作を言う。

〔鑑賞・問題点〕

最も美しいオモロのひとつである。舟を漕ぐ櫂の先からこぼれるしぶきをクバの花に譬え、波の花とみた表現者の目の詩的な豊かさに驚嘆させられる。梅雨明けの命輝く季節に、陽光を一杯に浴びて百名の浦を舟が漕ぎ進む。この舟は、他でもなく神祭りに臨む「わかきみ」をお招きし、乗せている神聖な舟である。その舟の船縁をならして櫂は漕ぎ揚げられる。その度毎に、美しくも神々しいクバの花・波の花が咲きこぼれる光景を思うというのである。13-845も本オモロと同趣。

NII-Electronic Library Service

Okinawa Prefectural University of Arts

18-1259

〔原　文〕

中くすくおもろのふし

一　わなの、おもやこが、
　　みやり、ぼしや、
　　ひやくなの、よせもい、かなし
又　わなの、まちやりこが
又　かつお、だけ、のぼて、
　　みやり、ほしや

〔復元形〕

一　和名の　思や子が
　　見遣り欲しや
　　百名の　寄せ思い加那志
又　和名の　まちやり子が
　　見遣り欲しや
　　百名の　寄せ思い加那志
又　嘉津宇岳　登て
　　見遣り欲しや
　　百名の　寄せ思い加那志

〔逐語訳・大意〕

1．和名の思や子が<見ていたいものだ。百名の寄せ思い様を>
2．和名のマチヤリ子が<見ていたいものだ。百名の寄せ思い様を>
3．嘉津宇岳に登って<見ていたいものだ。百名の寄せ思い様を>

和名の思や子、マチヤリ子が嘉津宇岳に登って、いつも見ていたいと思われる百名の寄せ思い様であることだ、と百名の方を見る、というオモロ。和名の思や子が嘉津宇岳に登るという事柄の叙述を通じて、百名の寄せ思いを讃えたオモロとみられる。

〔語　釈〕

おもやこ―思や子。『辞典』は人名とする。あるいは「おもや」は「おもひ（思い）・あ」で、これが「おもや」（ウムヤー）となったものか。ならば「思い子」と同じとなる。古謡語に「おもやせじ」がある（対語は「かなさァる　うてん」＝敬愛する天の神様）が、これは神名であろう。9-481に「玉くすく、あつる／おもやいは、もちなちへ」（玉城に有るオモヤイは持ち成して）がある。この「玉くすく」が島中の玉城であれば、「おもやこ」と「おもやい」の重なりが意味をもつかもしれない。重複オモロと合わせて２例のみ。

みやりぼしや―見遣り欲しや。「みやりほしや」の表記もある。動詞「みやる」の連用形に補助形容詞「ほしや」が接続した形。「みやる」は見る。『混集』

NII-Electronic Library Service

Okinawa Prefectural University of Arts

（坤・言語）に「みやりふしや　見度事也」とある。「ほしや」は『混集』（坤・言語）に「ほしや　物を望事　和調にほしきと云」とある。動詞の連用形に接続し、話者の願望、希求を表す。本例およびその重複オモロと10-521（「みやりほしや　しよりの　めつらしや」）、19-1316（「ちゑねんが　みやり、ぼしや」）の４例のみ。一般的な表現としては「みほしや」（見欲しや）で、現在の方言でもミーブサ、ミーブシャなどという。

よせもいかなし—人名。「寄せ思い」（『辞典』）。「かなし」は接尾敬称辞。「寄せ杜」説は、オモロ時代は未だｒ音の脱落は起こっていないとされるから、原則としては考えない方が良い。しかし、重複オモロでは「よせもりかなし」となっている。「よせもり」なら「寄せ杜」が当然考えられる。例えば「よよせきみ」「よよせとみ」などのように、貴重な何物かを寄せる杜ということで、御嶽の美称となる。なお、他には８-468に「一　あかのこか、よせもい／ひぢやりも、にきりも、かなしや」と「よせもい」の例があるのみ。

まちやりこ—人名。マチヤリ子。「わなの　まちやりこ」の用例は重複オモロを合わせて２例。「くてけんの、まちやり」（19-1301。対語は「くでけんの、わかきよ」）、「くてけんの、まちやりきよ」（14-1021「一　くてけんの、まちやりきよ／あか、つかね、けらへて／あんしおそいぎや、さしなしの、みこし／又　あかるまの、大やこ／あかつかね、けらへて」）の例がある。1021の例では刀剣を製作する人物、あるいは刀剣を入手し飾り立てることの出来る有力人物が考えられる。「くてけん」は知念村久手堅だから、「まちやり」は玉城・知念にゆかりのある人名であったか。

かつおだけ—嘉津宇岳。本部半島の嘉津宇岳（標高451m）が考えられている。『由来記』に本部間切嘉津宇村（15-83～85、107・108）、嘉津宇嶽（15-85）、嘉津宇根神（15-107）がみえる。オモロの他の語形と用例は「かつおうたけ」（13-934、14-1027）、「かつおたけ」（17-1205、17-1229）。これらはいずれも本部半島の嘉津宇岳を指す。このオモロでもやはり本部の嘉津宇岳か。「かつうたけ」に行くことが重要なことであったらしいことは、17-1205オモロからもある程度は想像される。しかし、何故、沖縄本島南端部の玉城から北部は本部半島の嘉津宇岳へ登ることが求められたか。考えなければならない問題である。あるいは、玉城・島中近辺にカツウの名を負った御嶽はないものかこまかな調

NII-Electronic Library Service

Okinawa Prefectural University of Arts

査がまたれる。

※垣花にウンナ（恩納）という旧家があって、美人が生まれる家系と伝えられる。その家はカツウ岳を拝むという。「恩納」という北部地名があり、この家が嘉津宇岳を拝むということは、このオモロを考える上でも参考になるか。

〔鑑賞・問題点〕

和名のオモヤ子・マチヤリ子がカツウ岳に登って、百名の方向を望見しているのであろう。その望見の背後にあるのは「百名のヨセモイが見たい」という、切なる感情である。そのヨセモイは男性なのか、女性なのか。これによってこのオモロが按司などの領主を讃美するオモロか、オモロでは例の少ない恋愛をうたったオモロかが決定される。さらに、「寄せ杜」ということであれば、望郷あるいは、土地誉めのオモロということになる。

その時カツウ岳は、島中あるいはその近辺にあるよりも、遠く本部半島にある嘉津宇岳である方がオモロの背景が広がって面白いと思われるが如何であろうか。

18-1260

〔原　文〕

ひやくなからのほてかふし

一　ひやくな、から、のぼて、
　　ねくに、から、のぼて、
　　しまそろて、
　　とも〻すゑ、みおやせ
又　しよりもり、ちよわる、
　　おきやかもい、かなし

〔復元形〕

一　百名から　上て
　　根国から　上て
　　島　揃て
　　十百精　みおやせ
又　首里杜　ちよわる
　　おぎやかもいがなし
　　島　揃て
　　十百精　みおやせ

〔逐語訳・大意〕

1．百名から上って、根国から上って＜島々は揃って、オギャカモイ様に百・千の霊力を奉れ＞

2．首里にいらっしゃるオギャカモイ様に＜島々は揃って、オギャカモイ様に百・千の霊力を奉れ＞

NII-Electronic Library Service

Okinawa Prefectural University of Arts

百名・根国から首里に上って、首里杜にましまして君臨なさるオギャカモイ様にお目にかかる。さあ、島々の我らは心を一つにして、オギャカモイ様に百・千の霊力を差し上げよう、というオモロ。

〔語　釈〕

ねくに—18-1253参照。「ねくに」を名乗るのは「いとかすの～」「うらおそい～」「たくしの～」「なかぐすく～」など。また「さしき」(14-1015、19-1287)、「なわしろ」(14-1016)、「はひら」(20-1335・1336)、「ふくじ」(20-1335・1344・1345)、「いとかず」(17-1223＝18-1253)、「ひやくな」(17-1230＝18-1260)、「よろん」(13-932) なども「ねくに」を対語としている。

とももすゑ—十百精。「とも」は、十×百で千、すなわち沢山、無数の意。「すゑ」は、ここでは精、すなわち霊力と考えた。ただ、オモロの「すへ」「すゑ」は、「末」と解釈されるものも多く、「精」と「末」を正確に弁別する決定的な方法は不明のままである。「末」の場合は「とももすへ　ちよわれ」(永遠にましませ) など時間的なことを問題としていると想定される。ここでは、「みおやせ」となっているから、差し上げられるモノを想定して、霊力・セヂを考えたわけである。

みおやせ—奉れ。動詞「みおやす」の命令形。本来は「み・おやす」で「み」は尊敬の接頭語。「おやす」は、差し上げるの意。『混集』(坤・言語) に「みおやせ」として「主上に捧る物を云也　みおやすれなとゝ云」とある。また『混集』(乾・言語) に「みおやすら」として「進上の事也　おやすら共云」とある。八重山方言で、差し上げる、召す、召し上がる等の意をあらわす動詞にオイシィンがある。また今帰仁方言にもえースンがあるが、これらは「おやす」と同語である。「みおやせ」の用例は196首。その内193首が反復部に出る。5-283、7-369、10-537の3首では対句部に出る。

おきやかもいかなし—オギャカモイ様。国王尚真の神号とされるが、語義は「御輝思い」が考えられ、本来は一般的な呼称であったとみられる。ここもその後者を考えて良いだろう。「おき (ぎ) やかもい」の出るオモロは58首。他に「おぎやかもいあちおそい」が1首 (13-854)。「おきやかもいかなし」は11首。「おきやかもいきやおやおうね」(13-900)、「よまさりのおきやかもひ」(5-

NII-Electronic Library Service

Okinawa Prefectural University of Arts

232）などの例がある。また、「おきやか」だけだと、「おきやかあちはい（ゑ）」（11-575＝21-1460）、「おきやかあんしはへ（ゑ）」（11-642、13-962）、「おき（ぎ）やかし」（17-1237＝18-1267 他）、「おき（ぎ）やかしひつぎ」８首（この８首は「おき（ぎ）やかへと（ど）もい」の８首と重なる。つまり、「おきやかしひつき」と「おきやかへともい」は対語として同一オモロに出るわけである）、「よまさりのおきやか」（5-253・263）、「世まさりのおきやかもひ」（5-232）の形がある。これらからも、「おきやかもい」が尚真王に固有の名称ではなかったことが知られるし、「おきやか」だけだとオモロ歌唱者の名としてもあったことがわかる（「おぎやかし」の例参照）。もっとも、巻一のオモロなどのように尚真王に限定して考えるべきオモロもまたあるから注意を要する。

〔鑑賞・問題点〕

百名から首里に上ることがうたわれたオモロである。「のぼて」とあることが重要であろう。「のぼる」は社会的・身分的関係を反映した言葉で、その下位にあるものが上位にあるものの場所へ移動することを言う語である。したがって、このオモロには、玉城と首里の間に存したこのような関係がうたわれているということになる。

そこで、その時代が何時のことであるかが大きな関心事となるが、手がかりは「おぎやかもい」という語であろうか。これが尚真王であれば15世紀末から16世紀の初頭という時代ということになろうし、それ以外の王を考えるとすれば、もっと時代を遡らせることもできる。

第一尚氏と玉城の関係、玉城の歴史の展開ともからむ興味ある事柄である。

18-1261

〔原　文〕

ひやくなからのほてかふし

一　ひやくな、から　かねて、
　　つれる、つれ、つれて、
　　かほうお、しより、おやくに
又　さきよた、から、かねて

〔復元形〕

一　百名から　かねて
　　連れる　連れ　連れて
　　果報首里親国
又　崎枝から　かねて
　　連れる　連れ　連れて

NII-Electronic Library Service

Okinawa Prefectural University of Arts

果報首里親国

〔逐語訳・大意〕

1．百名から囲み廻し（統べて）、連れる連れを連れて＜果報なる首里親国であることよ＞

2．崎枝から囲み廻し、連れる連れ連れて＜果報なる首里親国であることよ＞

百名の地から、崎枝の地から、統率する地域の並びゆく連れの者を連れて上っていく。果報に満ちた、素晴らしい首里の親国よ、というオモロ。1260のオモロとの関わりを考えるべきオモロか。

〔語　釈〕

かねて―囲んで。囲み廻して。動詞「かねる」の接続形。「かねる」は、現代の方言カニユンに同じ。オモロでは、囲む。支配する・統べる（12-692）、の意。琉歌では、遮るの意もある。（「涙雨降らち　かねれはも里や　この世ふり捨てて　あの世いまうち」全2331）。オモロの他の語形に「かねる」（12-692「筑紫玉　御玉　島　かねる　御玉」）がある。「かねて」の用例は8-420、13-931、15-1102、16-1150、19-1302（「島　かねて　按司おそい《おきやかもい》にみおやせ」の形）と17-1231＝18-1261（本例）。

つれる―連れる。列を連ねる。連れ立つ。同行する。重複オモロと合わせて2例のみ。「つれて」は、「つれる」の接続形。「つれて」は1例のみ。重複オモロ17-1231にはこの語は無い。

つれ―連れ。同行の者。「つれる」の連用形が名詞化したもの。重複オモロと合わせて2例のみ。

かほうお―果報。「かほう」と表記されるのが普通。「かほうお」は重複オモロと合わせて2例のみである。「お」は衍字とみられる。「かほう」は5例。美称辞として、「～くに」「～さうす」「～せち」「～てた」「～とき（時）」「～とし」「～とみ」「～ももえらび」「～よせくすく」「～よるみやかのもり」と使われる。また、上に次のような語を戴き、その語の示すものに恵まれる果報を表す。「あち～」「せぢ～」「ま～」「のち～」「よ（世）～」「よう～」「よく～」「よの～」「世～かなしおとん」「世～せち」「世～なさいきよ」「世～もり」「しまよの～さうす」。

しよりおやくに―首里親国。首里の親国。親国なる首里。首里の美称。後には

NII-Electronic Library Service

Okinawa Prefectural University of Arts

「親国」のみで首里を差す。用例は7-354・382、12-685、15-1052・1111、17-1231＝18-1261、14-993（対語は「あんしおやごに」）。「みれどもあかん（ぬ）、しより（首里）おやくに（国）」（見れども飽かぬ首里親国。1-7＝3-125）、「めつらしや、あかん、しよりおやくに」（珍らしや飽かん首里親国。7-390）と讃えられている。

さきよた―崎枝。地名。百名海岸、浜川御嶽の西方一帯をサチユダと称しており、近代期まで数戸の集落があった。その屋敷の遺構を示す石垣跡などが近年迄残っていた。オモロの「さきよた」はこの地を指すとみられる。因みに、オモロで「さきよた」と称されているのは、残波岬を枝とする読谷村周辺（オモロ原注に「読谷山之事」13-811、『混集』《坤・乾坤》に「さきよた　読谷山の事也　又大にし共云」）、百名（本オモロなど）、豊見城村平良（20-1368）である。用例は10-554、17-1231＝18-1261（対語は「ひやくな」）、13-811・812・902・904、15-1120・1121・1122（対語「おおにし」）、15-1116（対語「よむたんざ」）、20-1368（対語は「うらさき」）。

〔鑑賞・問題点〕

百名と首里との関係を考えなければならないオモロである。前のオモロでみた関係がここにも投影しているとみると分かりが良くなるのではないだろうか。首里が上位にあるから「果報首里親国」と讃えるのだろう。

「かねる」のところでみたように、オモロの中で「かねる」行為の対象は「しま」であった。すると、ここの「百名から　かねる」という詞句は、百名が周辺の浦々島々を「かねて」（統べて）ということになるだろう。つまり、周辺地域を統率するのが百名ということである。その百名の頭（領主）が先頭に立ち、「かねた」周辺地域の主立った者の一行を引き連れて、首里に上って行くのであろう。

もう一つの問題は、百名と周辺地域との関係である。百名がこの地域を「かねる」地域であったという点についても確証が欲しいのである。これは玉城の調査によって明らかにされるだろう。先にみたように百名は沖縄の稲作発祥の地であり、王府祭祀にあっても重要な土地であった。このようなこともカウントに入れておくべきだろう。

前のオモロと同様にいつごろのオモロかは分からない。前のオモロと関係があ

NII-Electronic Library Service

Okinawa Prefectural University of Arts

るとすれば、「おぎやかもい」を誰とするかでそれは推定されることになる。

18-1262

〔原　文〕

たくしたらなつけかふし

一　たまくすく、おわる、
　しまのぬしてだ、
　ともゝとの、ふまわり、しよわちへ
又　くにのねにおわる
又　けおの世かるひに

〔復元形〕

一　玉城　おわる
　島の　主太陽
　　十百年の　ふ廻り　しよわちへ
又　国の根に　おわる
　島の　主太陽
　　十百年の　ふ廻り　しよわちへ
又　今日の　良かる日に
　島の　主太陽
　　十百年の　ふ廻り　しよわちへ

〔逐語訳・大意〕

1．玉城にいらっしゃる島の主テダ（太陽）様は＜千年のフ廻りをなさいまして＞
2．国の根なる玉城にいらっしゃる島の主テダ様は＜千年のフ廻りをなさいまして＞
3．今日の良き日に島の主テダ様は＜千年のフ廻りをなさいまして＞

国の根なる玉城にいらしゃる島の主長様がフ廻りをなさって、今日の良き日に(何事かをなす)、とうたうオモロである。その何事かというのは、「ふまわり」に象徴されるまつりごとであろう。領主的人物とその儀礼行為をうたうオモロの断片だと思われる。

〔語　釈〕

ぬしてだ―主太陽。「ぬし」（領主）を褒め讃えた表現。「てだ」は、太陽を意味する語であるが、これが社会的関係を表現するようになると、「いとかす～」「おおさとの～」「かつれんの～」「きたたんの～」「きのわんの～」「ごゑくの～」「首里（しより）の～」「たなはるの～」「ねのしまの～」「はなくすく（城）～」「やまくすく～」「ゑその～」のように地域社会における太陽的な人物を指す語となる。さらには、「あち（んし）おそい～」「きみし～」「なさいきよ～」

NII-Electronic Library Service

Okinawa Prefectural University of Arts

「ぬし～」「ふれおもい（ひ）～」「わうにせ～」「ゑいと～」などのように、美称辞として種々の語について、前にくる名辞の示すものを修飾する。

ともゝと—十百年。「ともゝ」は、十×百で千。「と」は年。現代の方言でも年を表すのにトゥという語がある。千年で、永遠の意となる。

ふまわり—語義未詳。「フ廻り」としたが、「ふ」の意味が分らない。重複オモロは「ふうまわり」となっており、13-771にも同語がある（ここでは「とかしき」の対語）。さらに17-1217には「ゑひやの　ふうまわり」（対語は「ゑひやの　二はなれ」）という語がみえるから「ふまわり」は「ふうまわり」と考えた方が良いだろうか。さて、その「ふう」であるが、『辞典』も「果報」の「ほう」（報）を考えているが、それで良かろうか。あえて異説を唱えるとすれば「果報」の「報」は「ほう」と書かれるのが一般的であり、「ふうくに（国）」（2-82他）、「ふうくによせくすく」（17-1237＝18-1267）、「ふうくによるもりくすく」（19-1307）、「ふうまわり」（上記）だけが「ふう」と表記されている。このことから、「ふう」と「ほう」とは異なると考えることもできそうである。たとえば、石垣島の南西部にある岬の名がフーサキであることなども視野に取り込んでいくと、「ふうまわり」は神々のいます島の岬を崇め廻る儀礼であり、「ふうくに」は神高い国などと考えることもできるのではないだろうか。地名の対語として使われることもあわせて考えるべきであろう。

しよわちへ—したまいて。動詞「す」の連用形「し」に、尊敬の意を持つ補助動詞「おはす」の接続形「おはして」が付いた「しおはして」が元の形。用例多数につき以下説明は省略。

けお—今日。日本の歴史的仮名遣いでは「けふ」と書かれるが、『おもろさうし』では圧倒的に「けお」（87首）、「けよ」（25首）の形で、「けふ」の例は僅かに１例（3-103）のみである。

よかるひ—良き日。「よかるひい」の表記例が１例（5-287）あるが、その他の用例は全て「よかるひ」（78首）。

〔鑑賞・問題点〕

玉城の領主が吉日を選んで「まつりごと」をすることをうたうオモロの冒頭部であろう。したがって、その儀礼行為が如何様なものであったかは分らない。「ふうまわり」という言葉が手がかりを与えてくれそうであるが、これも正確に

NII-Electronic Library Service

Okinawa Prefectural University of Arts

は解釈できないでいる。今のところは「フーサキ」などという語から、「ふう」を神高い所、すなわち聖地とみて、いくつかの聖地を巡拝・巡行するような祭儀を想像している。

国王の聖地巡拝・巡行の祭儀のあったことは周知のことであり、その前身的な儀礼として、各地の領主による同行為の存在を考えてみようというわけである。

18-1263

〔原　文〕

こいしのかさしふとのかゝらのふし

一　たまくすく
　もりくすく
　いみやこ、より、
　もゝと、世す、ちよわれ
又　たゝみきよに、
　おきよくむに

〔復元形〕

一　玉城
　杜ぐすく
　　今こより
　　百年世す　ちよわれ
又　貴み子に
　おきよ雲に
　　今こより
　　百年世す　ちよわれ

〔逐語訳・大意〕

1．玉城、杜グスク<今から、百年の世にこそましますのだ>

2．貴み子に、オキヨ雲に<今から、百年の世にこそましますのだ>

玉城の杜グスクに（いらっしゃる）貴いお方、オキヨ雲様に、ああ、今から百年の後の世までましますのだ、と玉城の領主を讃えたオモロ。「たゝみきよに・おきよくむに」とあるが、助詞「に」につながる後の部分が切れており、それ以下の展開は不明である。

〔語　釈〕

もりぐすく―杜グスク。「いけの～」「かかす～」「きやのうち～」「くむこ～」「さちきや～」「しより～」「ちねん～」「ちやくに～」「とよみ～」「ねくに～」「ねたて～」「ねたか～」「ふうくによる～」「ゑすの～」などと出る。これらから地名を冠した杜グスクが各地にあると同時に、「くむこ」「ちやくに」「ねくに」などと美称されるものであったことも知られる。オモロを考える上でのキー

NII-Electronic Library Service

Okinawa Prefectural University of Arts

ワードである。

いみやこ—今こ。「今・こ」で、「こ」は接尾語とみるのが通説（『辞典』）だが、接尾語「こ」が人名や神女名、その他物質を表す名詞以外につく例はないことから、検討の余地があるかもしれない。あるいは、「いま　こいおり」（今、乞いおり）とも考えらる。用例は13-858・958、17-1233。「いみや」の用例多数（2-79、17-1181、他、24例）。

ももとよ—百年世。永遠の世。

たたみきよ—貴み子。貴い人。王、貴人をさす。オモロ原注に「按司かへし名也」「あちおそい替名地」とあるように、「按司襲い」を対語とする例が圧倒的（34例）である。その他の例は本例（＝17-1233）と21-1513にみる「浮雲」の例のみ。

おきよくむ—人名。『辞典』は「浮雲」とあてる。オモロ原注に「按司也」（11-562）とある。「くにのうきくも（うきよくも）」（11-562=21-1414）、「てたかませうきゆくも」（3-90）、「なさのうきよくも」（11-586＝21-1473）、「おきくむ」（17-1233）、「おきくも」（22-1513）など、いづれの語例ともに按司・貴人を指す語の対語として用いられている。この語もそのような人物を指す固有名詞、あるいは一般名詞とみるのが無難であろうか。

〔鑑賞・問題点〕

玉城の杜グスクに割拠している領主的人物を讃美するオモロ。原文は「たゝみきよに・おきよくむに」で叙述を展開する対句部がとぎれている。本来はもっと長いオモロで、1263番オモロはその冒頭部が残存したものであろうことは容易に推察できる。

領主的人物に対して何物かを差し出すのであろうか。「おきよくむ」を男性貴人と想定してきたが、これもまた問題としうるかもしれない。すなわち、神女と考える立場（『おもろさうし辞典・総索引』）もまた可能と考えられるのである。もっとも、オモロにおける「たたみこ」とその対語の関係に関わることであるから、その観点も加味してみるべきことはいうまでもない。

NII-Electronic Library Service

Okinawa Prefectural University of Arts

18-1264

〔原　文〕

かつれんはいきやるかつれんかふし

一　あまつゝは、あめたもす、むらね、
　　あまつゝは、
　　あいづまは、いきやかせ

又　あまつゝは、くれたもす、むらね

〔復元形〕

一　天頂は　雨だもす　漏らぬ
　　天頂は
　　あいづまは　いきやかせ

又　天頂は　くれだもす　漏らね
　　天頂は
　　あいづまは　いきやかせ

〔逐語訳・大意〕

1．天頂は、雨さえも漏らないのだ<天頂をば、アイヅマをば輝かせよ>

2．天頂は、くれ（雨）さえも漏らないのだ<天頂をば、アイヅマをば輝かせよ>

玉城アマチヂを讃えたオモロ。玉城アマチヂは雨さえも漏らさないのだぞ、くれ（雨）さえも漏らさないのだぞ。このアマチヂを、アイヅマを讃え、輝かせよ、というオモロ。

〔語　釈〕

あまつゝ―天頂。玉城アマチヂ。標高約180メートルの玉城城内一の郭にある御嶽。『由来記』に「雨粒天次　神名　アガル御イベツレル御イベ」として、「此嶽城内ニアリ。阿摩美久作リ給フトナリ」とある。『由来記』にはその他、毎年正月、九月「麦初種子」、一二月、そして「隔年一次、四月稲ノミシキヨマ」の時に王府の祭儀が行われたこと、毎年三・八月に「四度御物参」の祈願がなされたことが記されている。干魃の時には大雨乞いの祭儀が国王自ら参加して執り行われたことも記されている。『おもろさうし』巻22に掲げられた「みおやだいり」（王府の公的祭儀）の「知念・久高行幸」の最後に「玉城あまつゝにて」とあり、この地でも国王親拝の祭儀が執り行われたことがわかる。玉城ノロの管掌する御嶽である。

たもす―～さえも。～でも。7-390に「一　あんたもす、かに、あれ／げす、たもす、かに、あれ／めつらしや、あかん／しより、おやくに」（按司だもす斯

NII-Electronic Library Service

Okinawa Prefectural University of Arts

に有れ／下司だもす斯に有れ。珍しや飽かん首里親国）とある。他の用例は本用例と重複関係にある17-1234、22-1541のみである。琉歌などの「だいんす」（デン）のもとの形「だいもす」と重なる語である。

むらね—漏らぬ。動詞「漏る」の未然形「もら」に打ち消しの助動詞「ぬ」の已然形「ね」の付いた形。已然形で結ぶのは、前に係助詞「す」があるから。

あいつま—未詳語。城内の聖なる杜、神を祀る御嶽か。13-966に「一　あおりやへや／いくさ、いちへす、ちよわれ／さすかさは、わきかち、とて、はりやせ／又　あおりやへや、あいつます、ちよわれ」（煽りやへは、戦出でにこそ来おわれ。差笠は脇梶取て走りやせ／煽りやえや、アイツマにこそ来おわれ）とある。このオモロでは対語は「いくさいぢへ」（戦出で）で、聖地・御嶽とぴったり重なるというわけにはいかない。20-1334（下記参照）は本例と同様の出方である。これらの他、用例は本例の重複オモロ17-1234と22-1541のみ。

いきやかせ—未詳語。ここでは『おもろさうし辞典』に従って「輝かせ」と解してみた。20-1334に「一　まふに、いし、くすく／まふに、かなくすく／あまつゝは、あいつまに／又　くろかわの、よろい、いきやかせ／いと、とうしに、みなち」（摩文仁石城、摩文仁金城。天頂はアイツマに／黒皮の鎧、輝かせ。糸通しに見做ち）とある。他は本オモロの重複オモロの用例のみ。

〔鑑賞・問題点〕

「アマチヂは雨さえも漏らさない。そのアマチヂを、アイツマを輝かせよう」とうたって玉城アマチヂを讃美するオモロである。「雨さえも漏らさない」とうたうことが讃美の言葉となるのは、何故だろうか。雨が漏れることのない程に、鬱蒼と樹木が茂った森であるということだろうか。このように木々の茂った森こそが神のいます聖域として相応しいということなのであろうか。

このオモロは巻22-1541番にもでる。ここでは「知念玉城行幸之御時おもろ」の一首である。『由来記』2-92にはアマチヂで王府の雨乞いが行われ、この時「御唄」が謡われたことが記されている。この「御唄」はオモロのことであるが、このオモロがそこで謡われた可能性は非常に高い。重要な国家的祭儀として行なわれる雨乞いの中で「あめたもす　むらぬ」という文句がうたわれるのは何故であろうか。考えてみたいことである。

NII-Electronic Library Service

Okinawa Prefectural University of Arts

18-1265

〔原　文〕

たくしたらなつけかふし

一　たまくすく、おわる、
　いぢへき、きよらてたよ、
　此世、かけつめて、ちよわれ

又　くにのねに、おわる、
　いぢへき、きよら、てた

〔復元形〕

一　玉城　おわる
　いぢへき清ら太陽よ
　　此世　掛け詰めて　ちよわれ

又　国の根に　おわる
　いぢへき清ら太陽
　　此世　掛け詰めて　ちよわれ

〔逐語訳・大意〕

1．玉城にいらっしゃる勝れた、美しい太陽なるお方よ＜此世をずっと支配し、守護なさってましませ＞

2．国の根なる玉城にいらっしゃる勝れた、美しい太陽なるお方よ＜此世をずっと支配し、守護なさってましませ＞。

玉城の領主を讃美したオモロ。玉城の領主は、地上の太陽であり、勝れ、美しく、立派なお方である。永遠にこの世を支配し、守護してましませ、とうたっている。

〔語　釈〕

いぢへき―勝れた。『おもろさうし辞典』は「意気地」と当てたが、語源は「いでき」（出来）が考えられる。他に「～あさ」（～父）、「～いくさもい」（戦思い）、「～かわかみ」（川上）、「～きよらあんし」（清ら按司）、「～たちよもい」（タチ思い）、「～ちやなのおきて」（謝名の掟）、「～なりよもい」（成り思い）、「～（ま）ひやりよもい」（ヒヤリ思い）、「～大やこ」（大屋子）、「～あち」（按司）など、男性支配者を示す語を修飾する。ただ、16-1148のみは「～かみ」（神）と、神を修飾している。

きよらてだ―清ら太陽。「きよら」は清らで、美しい、立派である、の意。「てだ」は太陽で、ここでは、太陽に擬せられるお方、すなわち、按司、領主のこと。「きよら」が人物を形容する語例は本例と「きよらあんし」（清ら按司。20-1337・1341）のみ。また、君神を形容する「きよらきみ」（13-977）もある。

此世―此の世。この世界。他に13-773、19-1302、の２例がある。重複オモロ17-1236

NII-Electronic Library Service

Okinawa Prefectural University of Arts

は「この」で、「よ」を脱落させている。

かけつめて—掛け詰めて。支配し続けて。重複オモロを合わせて２例のみ。普通は「かける」（掛ける）、「かけおそう」（掛け襲う）。「かけふさう」（掛け相応う）の語形もある。「つめて」を構成要素とする複合動詞に「おいつめる」（追い詰めて。10-519のみ）がある。

〔鑑賞・問題点〕

玉城の按司様は、勝れた立派なお方である、この地上に輝く太陽なるお方である、と玉城の領主を讃美したオモロである。その讃美の果てにあるのが「このよ　かけつめて　ちよわれ」（此の世を支配しつづけてましませ）という詞句である。按司の支配の長久であることを言祝ぐことばをうたうことがオモロの重要な役割であった。そのことがよく分かる一首である。

18-1266

〔原　文〕

こいしのかさしふとのはらかふし

一　くむこもり、
　　まだまもり、くすく、
　　大きみに、しられゝ
又　みちゑりきよが、さしふ、
　　かみにしやが、むつき
又　あかべとり、せゝと、
　　まむが、とりせゝと

〔復元形〕

一　雲子杜
　　真玉杜城
　　大君に　知られれ
又　御宣り子が　さしぶ
　　神にしやが　むづき
　　大君に　知られれ
又　あかべとり　せせと
　　まむがとり　せせと
　　大君に　知られれ

〔逐語訳・大意〕

1．雲子杜、真玉杜グスクで＜大君様に申し上げよ＞
2．御宣り子のサシブ、神ニシヤのムツキは＜大君様に申し上げよ＞
3．あかべとりをしようと、まむがとりをしようと＜大君様に申し上げよ＞

雲子杜・真玉杜グスクで神のサシブ・ムツキが神を降ろし、神事が行われるのであろう。「あかべとり・まむがとり」の内容は分からないが、そう呼ばれる神

NII-Electronic Library Service

Okinawa Prefectural University of Arts

事が行われようとしていることをうたうオモロである。

〔語　釈〕

くもこもり—雲子杜。真玉杜の美称とされる。用例は7-383、17-1238・1240。「くもこもりおやのろ」（雲子杜親ノロ。5-233）、「くもこもりくすく」（雲子杜城。17-1239）の語形もある。また「くも（む）こ」単独の用例は5-236、9-477、11-572＝21-1457、11-595＝21-1462、17-1214に出る。「くもこ」を美称辞として持つ語には「～いし」（石）、「～いろ」（色）、「～ごちへ」（口）、「～すへ」（精）、「～た（だ）け」（嶽）、「～たつな」（手綱）、「～とみ」（富）、「～はし」（橋）、「～またまなわ」（真玉縄）、「～みあおり」（御煽り）、「～みうち」（御内）、「～みしやの」（未詳）などがある。これらはいずれも物質で、神や人間に類するものはない。これが「くもこ」が美称辞として使われる時の特徴である。「くもこ」という語がこれだけオモロに詠み込まれていることは、オモロ人の中の「くも」（雲）に対する想念の大きさを語っていよう。「うきくも」が「浮き雲」の意かどうかも含めて、オモロの中の雲について考えてみる必要がある。ちなみに、『由来記』によると美里間切古謝村と東恩納村にクモコ嶽がある。また、『由来記』巻2-41項には「今は存在しない引（ひき）」として「雲子富」引の名が見えている。

まだまもり—真玉杜。「真の玉のように立派な杜」の意。一般には首里杜の対語として使われるが、伊是名島の伊是名グスクの拝所の一つに「真玉杜」がある（『由来記』）。また、『由来記』には首里城内の御嶽として「キヤウノ内ノ前ノ御ミヤ首里ノ御イベ」を挙げ、「此首里森、阿摩美久、作リ玉フトナリ」とあるのと対応して、「真玉城ノ御嶽」に「此真玉杜、阿摩美久、作リ玉フトナリ」とある。これから真玉杜が「真玉城ノ嶽」とも称されていたことが分かると同時に、アマミキョが作ったという神話を背負う由緒ある御嶽として信仰を集めていたことも分かる。「しよりもりぐすく」（首里杜城）の対語としては「まだまもりぐすく」（真玉杜城）が使われる。用例多数につき、例示は割愛する。

みちゑりきよ—御宣り子。神名・神女名。また神名の一部にもなる。『混集』（坤、神祇）に「みちへりきよ　神の名なり」とある。儀保大あむしられの神名として『女官御双紙』に「にぢれきう大主　こてろま大神」、『由来記』に「ニヂレキウ大主　コテロマ大神」とある他、真壁ノロ神名として『女官御双紙』に

NII-Electronic Library Service

Okinawa Prefectural University of Arts

「みちりきよふ大神」とみえる。これらはいずれも「みちゑりきよ」の変化した形で、「みちゑりきよ」が神名として用いられた例である。オモロで「みちゑ（へ）りきよ」の用例は10例あるが、そのうちの７例が航海祭儀と関わりがあり、残り３例がその他の祭儀を背景としている。本例はその後者の事例である。「みちへりきよ」「みせりきよ」の他の語形には「みせりきよのおやのろ」（ミゼリキョの親ノロ）、「へとのみせりきよ（みちへりきよ）」（辺戸の～）、「やわれみせりきよ（みちへりきう）」（柔れ～。辺戸のミゼリキョの対語）、「わくのみせりきよ」（ワクの～）、「とまりみちへりきう（みちへりきよ）」（泊～）、「あまのみちへりきよ」（天の～）、「くにのみちへりきよ」（国の～）、「てくのみちへりきよ」（テクの～。天のミゼリキョの対語）、「ひらたみちゑりきよ」（平田～）などがある。ちなみに「みせりきよ」が「み・せりきよ」と考えられるのであれば、「せりきよ」「くせせりきよ」「くにせりきよ」「こばせりきよ」「なよせりきよ」などの語は一連の語系に連なるものとなる。そして、それらの語の語義は「せりきよ」とそれに上接する語の意味を検討することにより明確となることになる。

かみにしや―神にしや。神様。「にしや」は接尾敬称辞。～様。『混集』（坤、神祇）に「すづなり　反詞神にし　神の事なり」とあるのは、「すづなり」と「神にし」とが対語関係にあることを言っている。これと本例で「かみにしや」が「みちゑりきよ」の対語になっていることから、「かみにしや」は特定の神の名ではなく、固有名詞で示される神の対語として用いられる、神一般を指す語とみてよい。「あけしの（の）かみにしや」「しけかけの　かみにしや」などの語はそれを支持する。オモロでの他の語形は「かみにしやの　なでころ」（神にしやの撫で男）、「かみにしやか　ゑそこ」（神にしやが吉底）、「かみにしやの　そできよら」（神にしやの袖清ら）など。

あかべとり―未詳語。本例のみ。「とり」は「取り」か。

まむがとり―未詳語。本例のみ。「まむか」は「真向か」で、二者がしっかりと向きあうことをいうか。八重山方言でマンガーは、真向、真向の意。「まむか」が、マンガーと同じであれば、「あかべとり／まむかとり」は神と神の依代の神女が一対一でしっかり向き合い、対応していることをいうか。

せせと―しようと。

NII-Electronic Library Service

Okinawa Prefectural University of Arts

〔鑑賞・問題点〕

未詳語があり、全体の意味の取りにくいオモロである。雲子杜・真玉杜に神降りがあり、そして神事がなされるのだろう。そのためにサシブ・ムツキは控えている。神事の実態を表すのが「あかべとり・まむがとり」なのであろうか。「とり」ということからすると、神事で何らかのものの取り交わしがあるのであろうか。それとも語釈の項で考えたように、神霊の憑依をそう表現しているのか。

いずれにせよ、雲子杜・真玉杜でミゼリキョ神の降臨を得て行われる神事の一端をうたったオモロとみられる。

18-1267

〔原　文〕

あおりやへかふし

一　おぎやかしぎや、おもろ、
　つくしちやら、おほゑて、
　玉がはら、ふうくに、よせくすく
又　おきやかしぎや、せるむ

〔復元形〕

一　おぎやか子ぎや　おもろ
　筑紫ちやら　おぼゑて
　玉がはら
　ふう国寄せぐすく
又　おぎやか子ぎや　宣るむ
　筑紫ちやら　おぼゑて
　玉がはら
　ふう国寄せぐすく

〔逐語訳・大意〕

1．オギャカ子のオモロです<筑紫チャラを帯びて、玉ガハラ、フウ国を寄せるグスクであることよ>

2．オギャカ子のセルムです<筑紫チャラを帯びて、玉ガハラ、フウ国を寄せるグスクであることよ>

これはオギャカ子のオモロです、セルムです。領主様は筑紫チャラなる太刀を召し、グスクは玉ガハラ、フウ国をよせるグスクでありますことよ、というオモロ。

〔語　釈〕

おぎやかし―オギャカ子。御輝子か。「おぎやか」については18-1260参照。

NII-Electronic Library Service

Okinawa Prefectural University of Arts

おもろ—オモロ。オモロの中で、オモロの語そのものをとり上げた例は46首。「おもろ」を含む複合語には「おもろかまゑ」（オモロ貢）、「おもろくさり」（オモロ鎖）、「おもろたね」（オモロ種）、「おもろつつみ」（オモロ鼓）、「おもろね」（オモロ根）などがある。オモロ歌唱者として「おもろこたらつ」（オモロ小太郎つ）、「おもろとのはら」、「おもろねやかり」（オモロ音上り）がみえる。

せるむ—宣るむ。オモロの対語。「せるむ」は原注に「おもろの事也」(8-393)、「おもろ也」(14-1047、21-1506）とあり、「おもろ」の同義語と捉えられている。

「せるむ」の語源説を下に示す。

① 「宣宣（せせ）る」→「御宣宣（せせ）る」 →（動詞化） 「宣るむ」

② 「捭（せせ）る」→ せるむ

③ 「せせらぐ」の「せせ」→ せるむ

④ 「宣（せ）る物（も）」→ せるむ

①～③は『辞典』に紹介された語源説で、④は池宮正治氏の所説である。

つくしちやら—筑紫チャラ。刀の名。6-324の用例では、按司襲いの装束として「つくしちやら、はきよわちへ／てかねまる、さしよわちへ」（筑紫チャラを佩き給いて、治金丸を差し給いて）とうたわれ、20-1356では「きこゑつくしちやら／とやり、ふさゆわれ」（聞こえ筑紫チャラを取り、相応してましませ）と領主的人物の武具としてうたわれている。12-674＝15-1089では「つくしちゃら／たまの、きみつかい」（筑紫チャラ、玉の君使い）の形で出るが、文のつながり、関係性は不明である。「ちやら」は「太郎」か。「ももち（ぢ）やら」（百按司）「をなぢやら」（按司）など、按司・貴人をあらわすのに「ちやら」が使われている。

おほゑて—帯びて身につけて。武器を携えて。用例は17-1237＝本例と17-1243＝18-1273の二例。表記は「おほいて」「おほへて」「おほゑて」で、「おびて」の形はない。

たまがはら—玉ガハラ。玉の名。ガハラ玉。オモロにみえる玉について概観すると、「たま」単独の語例と、上に何らかの語がついて、いろいろな玉の種類を表す場合とがある。これには「つくし～み～」（筑紫玉御玉）、「つしやの～」

NII-Electronic Library Service

Okinawa Prefectural University of Arts

(粒の～)、「てう～」(上～)、「ま～」(真)、「よ～」(世) などがある。また本例のように特定の語の上につく例もある。オモロで「かはら」が重要な玉であったのは「かはらいのち」(ガーラ命)、「かはらよせおぐすく」(ガーラ寄せ御城) という語の存在からも知れる。八重山では「かはら」の玉をガーラダマ、アウガーラダマ (青曲玉) と称していたこと、その対語としてスバチィンダマ、マーリィダマが使われていたことが喜舎場永珣『八重山古謡』(上・下。1970年沖縄タイムス社) から知れる。また、玉の持つ呪的意味については別に準備するとして、これが古琉球から近世・近代期まで重要な習俗としてあったことは、喜舎場永珣の前掲書 (例えば、下巻271・272頁) に詳しい。

ふうくによせぐすく—ふう国寄せグスク。『辞典』は「報国寄せグスク」とする。前出「ふ (う) まわり」参照。

〔鑑賞・問題点〕

いわゆるオモロ歌唱者のオモロである。ここでは「おぎやかし」がオモロの歌唱者ということになる。このように「～が　おもろ」で始まるオモロは50首以上にのぼるが、その代表的なものが巻８の「あかいんこ・おもろねあがり」のオモロである。

本オモロは断片的であり、全体の意が取れないが、按司を讃え、グスクを讃美するオモロであろう。按司は、九州から舶載されてきた刀を帯び、その武力と富を誇っているのだろう。その按司の拠るグスクは、貴重で価値ある玉、ガーラ玉に満ち、フウ国をこの地に引き寄せるグスクである、と讃えている、と解釈してみた。

18-1268

〔原　文〕

こいしのかふし

一　くむこもり、
　　まだまもりくすく、
　　かねがなし、きみぼこり、けらへて
又　ひやくな、うちに、
　　ゑらておちやる、ま人

〔復元形〕

一　雲子杜
　　真玉杜城
　　金加那志　君誇り　げらへて
又　百名内に
　　選で置ちやる　真人

NII-Electronic Library Service

Okinawa Prefectural University of Arts

又　さきよたうちに、　　金加那志　君誇り　げらへて
　そゝて、おちやる、ま人　　又　崎枝内に
　　そそて置ちやる　真人
　　金加那志　君誇り　げらへて

〔逐語訳・大意〕

1．雲子杜・真玉杜グスクで＜金様は君誇りをお造りになりまして＞
2．百名の内に選んで置いた真人を＜金様は君誇りをお造りになりまして＞
3．崎枝の内に選んで置いた真人を＜金様は君誇りをお造りになりまして＞

今、試みに助詞を上のように補ってみると、雲子杜・真玉杜グスクで、玉城・崎枝の内の選りすぐりの真人たちが、何らかの事を成すことをうたったオモロということになろうか。その「何らかの事」は「君誇りげらへて」と深い関係を持つものであろう。

〔語　釈〕

かねがなし―金加那志。貴人の名とされる（『辞典』）が、詳しいことは分からない。用例は重複オモロと合わせて２例である。接尾語「かなし」の付く語で、この語のように無機物がくる例はなく珍しい。あるいは、金属を敬った表現か。ちなみに、末尾句が「げらへ」（造って）で終わる反復句（16例）で、「げらへ」る主体が本例のように無機物を表す名辞となっている例はない。これらから、この語を人物を表す語とみるのとは別の方向で考える余地があるかもしれない。例えば、上のように金属の敬称とみるか、または「きみほこり」の対語とみて、建造物を指す語とみることはできないだろうか。

きみほこり―君誇り。建物の名。一般的には首里城内の建物の名。「きみほこり」の名は「きみほこりのおじやう」（君誇之御門。奉神門のこと）と「君誇之欄干之記」（1562）とに表れている。これらに従うと、４-195などの「きみほ（ぼ）こり」は首里城の奉神門の南に連なる建物ということになる。『辞典』にはこの他久米島具志川グスク内（11-647）と玉城グスク内（本例及び重複オモロ）にもあったとする。前者については問題ないだろう。しかし、本例を基にする玉城グスク内云々については、雲子杜・真玉杜の所在地の問題も含めて、あるいは、検討の余地があるかもしれない。21-1397の「きみふくり」は「君

NII-Electronic Library Service

Okinawa Prefectural University of Arts

を誇り」かと思われる。

まひと—真人。立派な一人前の人。『混集』（坤、人倫）に「まむちよ」として「首里人　慶良間人と云事」とある。伊波本『混集』には「真人の転。慶良間人は例にならず」とあるから、伊波普猷は「首里人」に限定されると考えていたか。オモロでも「しよりまひと」「ぐすくまひと」の形があるからうなずける見解ではある。「けらゑまひと」「ゑらひまひと」は「まひと」を形容した表現である。「まひと」が単なる人民を言っていなかったことは、14-983で「まひとた」（真人達）の対語が「おきてた」（掟達）であることからも分かる。「まひと」をより丁寧に表現したのが「おまひと」であるが、これの発音ウマンチュに「御万人」と宛てるようになり、一般の人・民衆を意味するようになったようである。

そそておちやる—選んでおいた。動詞「そそる」の接続形「そそて」に補助動詞「おく」の過去の連体形「おきたる」の付いた「そそておきたる」がもとの形。「そそる」は日本古語で「揺すって選り分ける」の意。ここも対語が「ゑらておちやる」だから、「選り分けて置いた」で良かろう。本例と重複オモロの例のみ。

〔鑑賞・問題点〕

助詞が謡われていないので、何処で、誰が、何を、といったことが分からない。ここでは雲子杜・真玉杜グスクと呼ばれる聖地で、百名の内に選びおかれた真人たちが、と考えたが、「何を」の部分が結局は分からない。その「何を」は「君誇　げらへて」につながることであるのだろうか。そうであれば、グスク内の建物の造営をうたったオモロということになり、この事業を成している人物と玉城の真人たちを讃美しているオモロとみることができるであろう。

ただ、ここの「雲子杜グスク・真玉杜グスク」がどの地の聖地を言うかで、このオモロの解釈・鑑賞も違ってくるだろう。ここでは玉城のグスクにゆかりのある聖地を予想してみた。

18-1269

〔原　文〕　　〔復元形〕

あおりやへかふし

NII-Electronic Library Service

Okinawa Prefectural University of Arts

一　くむこ、もりくすく、
　　おわもりは、てづて、
　　世、まさる、ひやし
　　うちちへ、みおやせ
又　またまもりくすく
又　きこへ、あが、なさきよ

一　雲子杜城
　　おわもりは　手摩て
　　世勝る　拍子
　　打ちちへ　みおやせ
又　真玉杜城
　　おわもりは　手摩て
　　世勝る　拍子
　　打ちちへ　みおやせ
又　聞こへ吾が成さい子
　　おもわりは　手摩て
　　世勝る　拍子
　　打ちちへ　みおやせ

〔逐語訳・大意〕

1．雲子杜グスクにオワモリ神を祈りまして＜世の優れ勝るヒヤシを打って奉れ＞
2．真玉杜グスクにオワモリ神を祈りまして＜世の優れ勝るヒヤシを打って奉れ＞
3．名高い我が父なるお方は、オワモリ神を祈りまして＜世の優れ勝るヒヤシを打って奉れ＞

雲子杜・真玉杜グスクにましますオワモリ神を崇め祈って、我が父なる名高いお方様はオワモリ神を崇め祈っていらっしゃる。さあ、世の優れ勝るヒヤシを打って奉れ、というオモロ。

〔語　釈〕

おわもり—神名・神女名。高級神女の名として『女官御双紙』に「うわもり」「世高うわもり」「伊良部世高うわもり」の名があがっている。オモロでは「おもわり」の形で８首（重複も含めて）に出る。そのうち19-1324＝20-1387の用例は「つゝみおわもり」（鼓オワモリ）で、鼓の名のようでもある。他には、「きこゑ～」「とよむ～」の形で10首に、「きみのおわもりきみ」「せたかおわもりきみ」（精高オワモリ君）の形で１首に、「せたかおわもり」の形で１首に出る。

てづて—手摩て。祈って。祈願して。動詞「てづる」（祈る。祈願する）の接続形。対語は「いきよて」（い乞いて）、「のだてゝ」（宣立てて）。「てづら」の場

NII-Electronic Library Service

Okinawa Prefectural University of Arts

合は「おがま」(拝ま)。用例多数。八重山の男性神役のティズルベー、ティディビ、チンチビなどの名称は、いずれも「手摩り部」(祈る人)から来ている。

あがなさきよ—吾が成さい子。我らの父なるお方。「なさ」は動詞「なす」(生む)の連用形「なし」に人・ものを表す接尾語「あ」の付いた「なしあ」からの変化と考えられている(『辞典』)。「あさ」「あさい」とは関係はないだろうか。

〔鑑賞・問題点〕

雲子杜グスク・真玉杜グスクにまします神に祈願を捧げることを謡ったオモロだと思われる。その場所は神のまします聖地である。したがって「〜に」と訳した部分は「〜で」としても良いだろう。その聖地に祀られる神はオワモリ神である。この神を「あがなさきよ」が「てづて」というのである。一般では、祈り・手摩る主体は神女であるが、ここでは「あがなさきよ」となる。オモロではこのように神女以外の存在(按司など)が祈る主体となることが時に見られる。このこともちゃんと整理し、理解しておくべきことであろう。

18-1270

〔原　文〕

あおりやへかふし

一　きこへおわもりぎや、
　　くむこもり、おれわちへ、
　　なむぢや、こかね、
　　もちろ、きゆる、きよらや
又　とよむおわもりきや
又　あやの、てたは、さだけて

〔復元形〕

一　聞こへおわもりぎや
　　雲子杜　降れわちへ
　　銀　黄金
　　もぢろきゆる　清らや
又　鳴響む　おわもりぎや
　　雲子杜　降れわちへ
　　銀　黄金
　　もぢろきゆる　清らや
又　綾の太陽は　先だけて
　　雲子杜　降れわちへ
　　銀　黄金
　　もぢろきゆる　清らや

NII-Electronic Library Service

Okinawa Prefectural University of Arts

〔逐語訳・大意〕

1．名高いオワモリ神が、雲子杜に神降りなさいまして＜白銀や黄金の輝くさまの美しさよ＞

2．その名の鳴り轟いたオワモリ神が、雲子杜に神降りなさいまして＜白銀や黄金の輝くさまの美しさよ＞

3．美しい綾なる太陽を先立ちとして、雲子杜に神降りなさいまして＜白銀や黄金の輝くさまの美しさよ＞

その名の轟くオワモリ神様が雲子杜に神降りなさる、美しく綾なる太陽を先駆けとなさって神降りなさる。そのさまは、銀や黄金がきらきらと輝き、美しくも神々しい、というオモロである。「白銀や黄金がきらきらと輝き、美しく神々しい」という詞句が繰り返され、神降臨の壮厳さが視覚の世界に訴えかけられている。

〔語　釈〕

もちろきゆる—輝く。美しくきらめく。動詞「もどろく」（輝く）の連体形。オモロ原注の「清く遊ひなり」（15-1086）は、神が降臨して遊ぶ神々しい様をとらえての注であろう。語例、語形ともに多数だが、その光り輝く様がどのようであるかについては諸説があって定まっていない。外間守善氏は「目がちらつき形象がまだらではっきりしない状態をいう」（『南島文学』1976年　角川書店刊　40・41頁参照）とし、池宮城正治氏は「霊力の発散する状態の視覚的な表現」（『混効験集の研究』1995年　第一書房刊　282頁参照）と、光が直線的に放射・発散するような状態を想定しているようである。

あやのてだ—綾の太陽。美しい太陽。ここでは按司や領主などの太陽的な人物をいうのではないだろう。太陽の光そのものか、それに擬せられる神（あるいは神女）をいうのではなかろうか。本例のみ。「あやのてに（天）」（綾の天。神名）と関係があるか。

さだけて—先立てる。動詞「さだける」の接続形。前を行かせる。露払い役として前を歩ませる。対語「しだけて」（従がえて）。オモロで「さだけ」られるのは、「もりおとちや」（守り弟者）、「なおりよ・あまへよ」（稔り世・歓え世）、「もぢろきや・ひぢよろきや」（輝く物。幡ヵ）などで、いずれも、後から来る存在に比して下位に位置するものである。これに対して「あやのてた」は「て

NII-Electronic Library Service

Okinawa Prefectural University of Arts

だ」（太陽）という語からみて、最高の存在に類するもののようにみられ、にわかに合点がいかない。オワモリがそうだというのだろうか。それともより高位の存在が後ろにひかえているのだろうか。自動詞の形は「さだる」。

〔鑑賞・問題点〕

神の降臨をうたうオモロであろう。オワモリ神が雲子杜に降りてくる。「綾の太陽」を先立ちとして降りてくる。そのさまが、金や銀がきらきらと光を放って輝くようだ、と言うわけである。神の降臨を「もちろきゆる」と表現するのはオモロとしてはほとんど常套の部類に入る。

「あやのてだ」をここでは、オモワモリ神の先立ちとなる存在と考えたが、これについて疑問がないわけではない。「てだ」をこのように下級の存在とすることはオモロとしてはこれまたほとんど例の無いことである。しかし、詞章としては「さだけ」られる存在となっており、訳を通すとこうなってきてしまう。「あやのてた」なる神、あるいは神女について、「あやのてに」もふくめて慎重に考えるべきであろう。

18-1271

〔原　文〕

あおりやへかふし

一　きこゑ、あやの、てに、ぎや、
　すへの、ひやし、
　めづら、ひやし　みおやせ
又　とよむ、あやの、てにぎや
又　くむこもりおれわちへ

〔復元形〕

一　聞こゑ綾の天ぎや
　精の拍子
　珍ら拍子　みおやせ
又　鳴響む　綾の天ぎや
　精の拍子
　珍ら拍子　みおやせ
又　雲子杜　降れわちへ
　精の拍子
　珍ら拍子　みおやせ

NII-Electronic Library Service

Okinawa Prefectural University of Arts

〔逐語訳・大意〕

1．名高い綾の天神が＜霊力溢れたヒヤシ、珍しいヒヤシを奉れ＞

2．その名の鳴り轟いた綾の天神が＜霊力溢れたヒヤシ、珍しいヒヤシを奉れ＞

3．雲子杜に神降りなさいまして＜霊力溢れたヒヤシ、珍しいヒヤシを奉れ＞

名高い「綾の天」神が、その名の轟いた「綾の天」神が雲子杜に神降りなさいまして、さあ、霊力溢れたヒヤシ、珍しいヒヤシを奉れ、と神の降臨を讃えるオモロである。「さあ、霊力溢れたヒヤシ、珍しいヒヤシを奉れ」と繰り返しうたって神を讃えるのである。

〔語　釈〕

あやのてに―綾の天。神名。本例と1272番オモロ、そしてそれぞれの重複オモロと10-537、13-882・980の７首のオモロに出る。10-537では「中へ～」（中辺～）、「くもへ～」（雲辺～）の形で、天空の美称のようにも思われるが、やはり神の名か。13-882・980の「あやのてに（天）」は、天の美称かと思われる。上の「あやのてだ」と関わりがあるかとも思われるが不詳。

めづらひやし・すゑのひやし―珍ら拍子・精の拍子。「ひやし」を讃えた表現。「めづら」は、稀である、美しい、立派である、の意。「すゑの」は霊力ある、霊力に満ちたの意。用例は本例と1272番オモロ、そしてそれぞれの重複オモロと４-188＝22-1514の６首に出る。対語「すゑのひやし」（精の拍子）から、「めつらひやし」の実体が、霊力豊かな拍子であることが分かる。「めつらこゑ」（珍ら声）、「めつらしやてた」（珍らしや太陽）という語もある。

〔鑑賞・問題点〕

神の降臨をうたう一連のオモロの一首。ここでは「精のひやし・珍らひやし」が神を讃えるものとして出てくる。

18-1272

〔原　文〕

あおりやへかふし

一　きこへ、あやの、天ぎや、
　　くむこもり、おれわちへ
　　すへの、ひやし、

〔復元形〕

一　聞こへ綾の天ぎや
　　雲子杜　降れわちへ
　　精の拍子

NII-Electronic Library Service

Okinawa Prefectural University of Arts

めつら、ひやし、みおやせ
又　とよむ　あやの、天か
又　なさきよもいが、み御まへ

珍ら拍子　みおやせ
又　鳴響む　綾の天が
雲子杜　降れわちへ
精の拍子
珍ら拍子　みおやせ
又　成さ子思いが　み御前
雲子杜　降れわちへ
精の拍子
珍ら拍子　みおやせ

〔逐語訳・大意〕

1．名高い綾の天神が雲子杜に神降りなさいまして＜霊力溢れたヒヤシ、珍しいヒヤシを奉れ＞

2．その名の鳴り轟いた綾の天神が雲子杜に神降りなさいまして＜霊力溢れたヒヤシ、珍しいヒヤシを奉れ＞

3．父なるお方様のみ御前、雲子杜に神降りなさいまして＜霊力溢れたヒヤシ、珍しいヒヤシを奉れ＞

名高い「綾の天」神が、その名の轟いた「綾の天」神が雲子杜に神降りなさいまして、父なる御方の御前に神降りなさいまして、「さあ、霊力溢れたヒヤシ、珍しいヒヤシを奉れ」と繰り返しうたって、神を讃えている。これは1271番オモロとまったく同じである。

〔語　釈〕

なさきよもい—成さ子思い。父なるお方様。普通は「なさいきよもい」となるところ。「なさきよもい」の例はこの１例のみ。重複オモロ17-1242は第２節までで、この詞句を欠く。

み御まえ—み御前。「前」の前に「み」「御」と２つの尊敬・丁寧の接頭語を重ねて敬意を強めた表現。「あち（あんし）おそいきや～」（按司襲いが～）、「たゝきみよが～」（貴み子が～）、「なさきよもいが～」（成さ子思いが～）、「大ぬしが～」（大主が～）、「せたかこが～」（精高子が～）、「大きみきや～」（大君が～）、「きみ〳〵の～」（君々の～）という形で出る。国王・男性貴人と神・君にのみついていることがわかる。琉歌語としてはミヌメと発音する。用例は９-

NII-Electronic Library Service

Okinawa Prefectural University of Arts

489他、15首に出る。

〔鑑賞・問題点〕

直前のオモロ（1271番）と同様、神の降臨をうたう一連のオモロの一首。ここでも「精のひやし・珍らひやし」が神を讃えるものとして奉られる。

このオモロと1271番オモロとは構造的に同一であるが、詞句の構成に異なりがある。すなわち、1271番オモロでは「雲子杜　降れわちへ」が、本来B／B'の対句を構成するものであるのに対し、このオモロではA／A'、B／B'、の対を構成するA（第一節）・A'（第二節）、B（第三節）・（B'）それぞれの一部となっていることである。この分1271番オモロよりも一節の詞句の分量が増えているわけである。しかし、大意の所でみたように、一首の内容は両オモロともほぼ同じである。

18-1273

〔原　文〕

あおりやへかふし

一　よだいきよが、おもろ、
　　つくしちやら、おほへて、
　　けらへて、とも〻と、ちよわちへ
又　おぎやかしぎや、おもろ
又　きこゑたまくすく

〔復元形〕

一　よだい子が　おもろ
　　筑紫ちやら　おぼへて
　　げらへて　十百年
　　ちよわちへ
又　おぎやか子ぎや　おもろ
　　筑紫ちやら　おぼへて
　　げらへて　十百年
　　ちよわちへ
又　聞こゑ玉城
　　筑紫ちやら　おぼへて
　　げらへて　十百年
　　ちよわちへ

〔逐語訳・大意〕

1．ヨダイ子のオモロです＜筑紫チャラを帯びて、立派に飾り造りまして、千年の末までもましまして＞

NII-Electronic Library Service

Okinawa Prefectural University of Arts

2．オギャカ子のオモロです＜筑紫チャラを帯びて、立派に飾り造りまして、千年の末までもましまして＞

3．名高い玉城は＜筑紫チャラを帯びて、立派に飾り造りまして、千年の末までもましまして＞

これはヨダイ子ノオモロです、オギャカ子のオモロです。この玉城は、領主様は筑紫チャラなる太刀を召し、立派に飾り造りまして千年の末までもましまして、と玉城を讃えるオモロの冒頭部。

〔語　釈〕

よだいきよ―ヨダイ子。人名。オモロの歌唱者とみられる。本例とその重複オモロと8-441に出るが、441番オモロでは「～は、きくる」（～は聞くる）となっていて、一般的なオモロ歌唱者のうたわれ方とは異なっているようである。

〔鑑賞・問題点〕

1267番オモロと同様、いわゆるオモロ歌唱者のオモロの一首。内容的にも「筑紫ちやら　帯ぼへて」と、重なるものがあるが、1267番オモロで「玉がはら　ふう　国寄せぐすく」と、グスク・土地を讃えていた反復句が、ここでは「げらへて　十百年　ちよわちへ」と、按司・領主を讃美する句に変わっている点が異なる。

問題は「げらへて」の対象を何とみるかであろう。「げらへる」は、基本的な語義としては、造営する、綺麗にする、立派にする、などを表すが、ここでは具体的な対象物が示されていない。按司自身が「筑紫チャラ」を帯びて身を飾るのか、按司がグスクなどの建造物を造営するのか、さらには、按司がこの玉城の地を整え、立派にしているのか、いろいろ考えられる。オモロ一般からすると、建造物の造営が一番考えやすいが、刀（「筑紫チャラ」）を帯びる、ということに着目すると、按司が身を飾ることも考えられる（しかし、この場合、一首のオモロのスケールが小さくなるようにも思われる）。三番目の案については、あまり用例はないように思われるが、いかがだろうか。

NII-Electronic Library Service

Okinawa Prefectural University of Arts

18-1274

〔原　文〕

一　やかぶ、のろ
　　けはや、のろ、
　　せくたち、
　　たちよわる、とよみ
又　たけこらが、
　　かみにしやが、
　　せくたち

〔復元形〕

一　屋嘉部のろ
　　けはやのろ
　　せくたち
　　立ちよわる　鳴響み
又　たけこらが
　　神にしやが
　　せくたち
　　立ちよわる　鳴響み

〔逐語訳・大意〕

1．屋嘉部ノロ、けはやノロが<せくたち、立ちなさる高名なお方>

2．たけこらが、神ニシャが<せくたち、立ちなさる高名なお方>

屋嘉部ノロ・けはやノロ様が神祭りをなさる。たけこらが・神ニシャ様が神祭りをなさる。せくたち（未詳）、立ちなさる高名なお方よ、ということであろうか。神女が執り行う神事と関係するオモロと思われるが、詳細、その他は不明である。

〔語　釈〕

やかぶのろ—屋嘉部ノロ。神女の名。屋嘉部は現在の玉城村屋嘉部。「もと、あたん口という村に属したが、嘉靖38年（1559）に尚元王が和姓２世国頭子景常に当地の田地を下賜し、屋嘉部村を創建したという（球陽尚元王４年条）」（『地名大辞典』）が、『おもろさうし』にすでに「やかぶ」の名が見えているから、村の歴史は当然それより古い。『由来紀』によると屋嘉部ノロは糸数村の根石城之嶽、前川村のウケノハナノ嶽・ハチヤノ嶽、屋嘉部村のコバウノ嶽御イベでの祭祀を司祭した。また、屋嘉部ノロ火の神は糸数村にあり、毎年三・八月の四度御物参、稲穂祭三日崇の時には屋嘉部ノロにより祭祀がとり行われた。

けはやのろ—けはやノロ。神女の名。『辞典』は「『やかぶのろ』（玉城村屋嘉部のノロ）の別名」とするが、中城のよきやノロの例もある（2-55）。「けはや」の意は不明だが、「気早い」を考えている。現在の方言のチーベーサン（気が

NII-Electronic Library Service

Okinawa Prefectural University of Arts

早い）などにつながる語であろうか。重複オモロもあわせて３例のみ。

せくたち—未詳語。「せいくさ・たち」の「さ」が脱落した形で、「精軍立ち」か。「せこさたち」（精軍立ち。３-94）の形がある。１例のみ。1244では「すへとこち」。「せいくさ」は「せいいくさ」（13-763）から来た語。「せいくさせち」「せいくさゑが」などの複合語形を含めて19用例がある。また「せくさ」「せこさ」（精軍）の表記がある。なお、「すへとこち」の形からすると、「せいくさ・たち」は苦しいか。

たけこら—「神女名。玉城村屋嘉部のノロ」（『辞典』）という。あるいは「嶽・子・ら」で、神女をいう語か。対語「かみにしや」からはこれが良いか。１例のみ。「かみにしや」の対語はほとんどが神女名だが。21-1500に対語「ほのこら」がある。関わりがあるか。

かみにしや—前出。「かみにしや」の対語は23種ある（『おもろさうし対語索引』＜浜田泰子編　1988年　ロマン書房刊＞参照）。

〔鑑賞・問題点〕

未詳語があり、全体の意味はとりがたい。神女の名が見えているから、神事に関わりの深いオモロであろう。屋嘉部ノロと「たけこら」「かみにしや」の関係が分らないから、具体的な場面はわからない。

また、「せくたち」もこのままではどうしようもないように思われるが、「せこさたち」と同じであれば、どうにかなりはしないか。すなわち、「精軍立ち」で、反復部は、玉城の軍勢が出発するに際して、その軍勢とそれを率いる按司を讃えたものとみるわけである。すると、戦勝を予祝する神事をうたうオモロの冒頭部ということが考えられるのではなかろうか。一つの考えである。

18-1275

〔原　文〕

中くすくおもろのふし

一　いとかすに、おわる、てだ、
　　ゑぞの、てだ、みちゑ、
　　みちまわて

又　やかぶ、かち、あよむ、てだ

〔復元形〕

一　糸数に　おわる　太陽
　　伊祖の　太陽　見ちゑ
　　みち廻て

又　屋嘉部かち　歩む　太陽

NII-Electronic Library Service

Okinawa Prefectural University of Arts

伊祖の　太陽　見ちゑ
みち廻て

〔逐語訳・大意〕

1．糸数にいらっしゃる太陽なるお方は<伊祖のテダなるお方を見て、充ち廻って>

2．屋嘉部へと歩む太陽なるお方は<伊祖のテダなるお方を見て、充ち廻って>

糸数の按司様は、屋嘉部へと歩まれる按司様は、「ヤレ、伊祖のテダなるお方をごらんになって、満ち足りていらっしゃて」と、糸数の按司を讃えるオモロの冒頭部である。

〔語　釈〕

いとかず—糸数。地名。用例は本例＝17-1245、17-1233=18-1253。12-693の「いとかす」はオモロ歌唱者の名であろう。「いとかすてた（だ）」（糸数太陽。17-1246=18-1276、17-1247＝18-1277)、「いとかすのねくに」(糸数の根国。18-1279・1280、「まいとかす」（真糸数。9-492、19-1284）の語がある。

ゑぞ—伊祖。浦添市伊祖とする（『辞典』)。浦添伊祖には伊祖グスクがある。伊祖グスクは英祖王統（1260～1349）をひらいた英祖王の父・恵祖世の主とその父祖の居城。英祖王統は英祖（在位40年）を初代とし、２代大成（在位９年)、３代英慈（在位５年)、４代玉城（在位23年)、５代西威（在位13年）まで、90年間続いた。「ゑそのてた（だ)」の用例は本例と重複オモロのみである。これが浦添伊祖の太陽なる人物であると考えられるのは、玉城グスクが英祖王統第四代玉城王の即位前の居城という伝承があるように、玉城（島中）と伊祖との関わりがあるからである。これからみて、この「てだ」を玉城王あるいは、その周辺の人物とすると、このオモロの年代も自ずと特定とされてくる。

みちまわて—『辞典』は「みち　まわて」と二語にきる。すなわち「道廻って」である。しかし、ここではこの考えから離れて「充ち廻る」という語を考えてみた。それは「見れば　みつまわて」(11-606）の例からである。この場合は「水　廻て」と解しているが（西郷信綱・外間守善『おもろさうし』<日本思想大系18>　1972年　岩波書店)、「みちまわて」と「みつまわて」は統一的に考えた方が良いのではないかと思う。「充ち廻る」という表現も微妙ではあるが、十分に満ち足り溢れる、というような状態を考えている。

NII-Electronic Library Service

Okinawa Prefectural University of Arts

〔鑑賞・問題点〕

糸数の按司を讃えたオモロであろう。糸数の按司が屋嘉部へと歩むさまをモチーフとしたオモロであろうが、全体の内容はこれまた不明である。

このオモロの「伊祖のテダ」を浦添伊祖の按司とみると、「伊祖の戦思い」と讃えられた人物・英祖王（それ以前もふくめて）や、あるいは語注にふれた玉城王などが浮かびあがってくる。いずれであるにせよ、当時の浦添と玉城の関係を考える必要がある。当時すでに浦添と玉城をつなぐこのような関係が成立していたとすれば、オモロにおける人の移動・交流は私達が想像するよりもはるかに広範かつ大規模に行われていたのではなかろうか。ただ、「見ちゑ　みち廻て」の解釈とも関わるが、拙解のようであれば、伊祖と糸数の関係はどのようなものであっただろうか。

伊祖が、浦添伊祖とみた私解のとおりであれば、このオモロは、糸数を中心とする玉城の歴史が早くから他地域と関係しながら動いていたことを知らせるオモロで、貴重ということになる。

18-1276

〔原　文〕

うちいては大さとのてたのふし

一　いとかす、てだよ、
　　あんしおそい、てだよ、
　　あまへて、かかちよわれ
又　けおの世かるひに
（又）けおのきやかるひに
又　うらさきに、つかい、
　　がなはに、つかい

〔復元形〕

一　糸数太陽よ
　　按司襲い太陽よ
　　歓へて　輝ちよわれ
又　今日の　良かる日に
　　今日の　輝る日に
　　歓へて　輝ちよわれ
又　浦崎に　遣い
　　我那覇に　遣い
　　歓へて　輝ちよわれ

〔逐語訳・大意〕

1．糸数太陽様よ、按司襲い太陽様よ＜歓び、輝いて、ましませ＞
2．今日の良き日に、今日の輝かしい日に＜歓び、輝いて、ましませ＞

NII-Electronic Library Service

Okinawa Prefectural University of Arts

3．浦崎に使いを遣り、我那覇に使いを遣り＜歓び、輝いて、ましませ＞

糸数の太陽なるお方様は、按司々々を支配する太陽なるお方様は、今日の良き日に、今日の輝かしい日に、浦崎に、我那覇にお招きのお使いを遣りなさって、「ヤレ、太陽なるお方様こそは　歓び、輝いて、ましませ」、と糸数の按司を讃えるオモロである。

〔語　釈〕

いとかずてだ―糸数太陽。糸数の太陽なるお方。糸数の按司を讃えた表現。

あんじおそいてだ―按司襲い太陽。按司の尊称。オモロでは普通は首里の国王を指す。それが糸数の按司に対して用いられていることは注目して良い。

うらさき―浦崎。豊見城村我那覇のあたりか。比定地未詳。他に20-1365に「がなは　とよみ／うらさきに　とよみ」（我那覇に鳴響み／浦崎に鳴響み）とある他、20-1368に「うらさきの　たいら」（浦崎の平良）とある。

がなは―我那覇。豊見城村我那覇。他に「かなはおきて」（我那覇掟。20-1367）、「がなはとよみみちや」（我那覇鳴響み御駄。20-1365）、「がなはもり」（我那覇杜。20-1366）と出る。近世の我那覇村の石高は「高究帳」によると、高頭489石余で、豊見城間切りでは群を抜いて大きな石高であった。（『地名大辞典』）。『由来紀』によると、我那覇には我那覇ノ嶽、ギウノ森、崎山森、の３御嶽がある他、我那覇巫火神、中城根屋、中城之川、イスラ川、ワキヤ川、我那覇之殿の６つの拝所があり、いずれも我那覇ノロが祭祀者である。ちなみに我那覇ノロは名嘉地村、瀬長村、伊良波村の祭祀も司祭した。

〔鑑賞・問題点〕

糸数按司を讃えたオモロ。按司が近隣の浦崎・我那覇に使いを出していることがうたわれている。その使いの内容は残念ながら不明であるが、領主に対するものであれば、おのずとその関係も分かるのではなかろうか。すなわち、糸数按司の勢力が現在の豊見城の一部にも及んでいたであろうこと、少なくとも、両者が友好関係を結んでいたことが推測されるのである。

なお、原文の５行目の行頭の「又」は誤記によるものだろう。第１節（第１・２行目）、第３節（第６・７行目）が、１節内で対句を構成する型であることより、第２節も第４・５行で１対を構成するものとみられるからである。「又」はとって解釈した。

NII-Electronic Library Service

Okinawa Prefectural University of Arts

18-1277

〔原　文〕

うちいては大さとのてたのふし

一　いとかす、てだ、
　あんしおそい、てだよ、
　世、そわる、ひやし、
　うちちへ、みおやせ
又　けおの世かるひに
　けおのきやかるひに
又　くらまる、もたちへ、
　みとろは、もたちへ
又　わたさは、わたせ、
　くださは、くだせ

〔復元形〕

一　糸数太陽
　按司襲い太陽よ
　　世添わる　拍子
　　打ちちへ　みおやせ
又　今日の　良かる日に
　今日の　輝る日に
　　世添わる　拍子
　　打ちちへ　みおやせ
又　くらまる　持たちへ
　みとろは　持たちへ
　　世添わる　拍子
　　打ちちへ　みおやせ
又　渡さば　渡せ
　下さば　下せ
　　世添わる　拍子
　　打ちちへ　みおやせ

〔逐語訳・大意〕

1．糸数太陽様よ、按司襲い太陽様よ＜世が添う拍子を打って奉れ＞
2．今日の良き日に、今日の輝かしい日に＜世が添う拍子を打って奉れ＞
3．くらま（弓）を持たせて、みとろ（弓）を持たせて＜世が添う拍子を打って奉れ＞
4、渡すならば、渡しなさい。下すならば、下しなさい＜世が添う拍子を打って奉れ＞

糸数の太陽なるお方、按司襲い様よ、今日の良き日に、今日の輝かしい日にクラマ（弓）・ミトロ（弓）を配下の者に持たせて、渡すのであれば渡しなさい、下すのであれば下しなさい、「さあ、私たちは按司様に、世が添い治まってくる拍子を打って奉ろうよ」と、糸数の按司を讃えるオモロであろう。

NII-Electronic Library Service

Okinawa Prefectural University of Arts

〔語　釈〕

よそわるひやし—世添わる拍子。「そわる」は、添うで、添い従う、すなわち、配下となるの意であろう。「よそわり」（世添わり。5-250）は「首里城正殿の別名であろう」（『辞典』）。「よそわる　みこし」（世添わる御腰。8-467）は刀を讃えた句。「世そわる　あやこ」（4-183）、「世そわる　くにつぼに」（19-1282）の例もある。

くらまる—「くらま・る」か。重複オモロでは「くらま」のみである。「る」は「ど」と同じ係助詞か。重複オモロと合わせて2例のみ。

みとろ—弓のことという（『辞典』）。この語形では重複オモロと合わせて2例のみであるが、「みとろかね」（10-537の反復句として「みとろかね　みおやせ」と出る。「あふ雲の鎧は　積み上げて　みおやせ」が第3節の対句部）がある。9-486の「みちよろ」（「君よ　みちよろ　見遣り」）も「みとろ」の可能性があるか。『由来記』3-55に「弓矢／神言葉ニ、ミタラト云。尊敦／御矢、今ニ至テ、崇元寺大廟ニ宝納セラル」とある。このミタラと「みとろ」は同一語からの変化か。

わたさば—渡さば。渡すならば。この語形例は重複オモロと合わせて2例のみ。

わたせ—渡せ。渡しなさい。この語形例も重複オモロと合わせて2例のみ。

くださば—下さば。下すならば。「くだす」は呉れるの尊敬語。下の「くだせ」はその命令形。両語形とも重複オモロと合わせて2例のみである。

〔鑑賞・問題点〕

糸数の按司を讃えたオモロであろう。糸数の按司が今日の良き日に配下の者に弓を持たせて巡行するのであろうか。威儀を正して出かける様に「按司様に、世が自ずと治まり添い従うヒヤシを打って奉れ」とうたいかけているものと思われる。「世添わる　拍子」という表現に、按司の「徳」を讃える心意があるのだろう。按司の人柄故に世も自ずと按司に寄り添って来るというニュアンスである。

「渡さば　渡せ」が具体的に何を、どうしようとしているかが分らない。文字面からみれば、「くらま・みとろ」を渡すならば～、ということになるのだろうが、誰が・誰にということがわからない。配下の者の手から手へ、ということであろうか。であれば、これはどのようなことを意味するものであろうか。あるいはこの「渡す」は物を手渡すではなく、河・海を渡る、渡すことも考えるべきで

NII-Electronic Library Service

Okinawa Prefectural University of Arts

あろうか。オモロの中の「わたす」はこの意味の方が多い。そうであれば、いよいよ、按司の巡行を叙事的に謡おうとするオモロとしての性格が強くなってくる。

しかし、「下さば　下せ」は、どうであろうか。やはり武具を手から手へと渡し、下して行くのであろうか。それとも、高いところから低いところへと下らせよ、ということか。なお不明である。

18-1278

〔原　文〕

うちいてはあかるゑとのふし

一　ちゑねん、おわる、わかきよ、
　やぐめさよ、
　ふなこし、こまらや
又　さきに、おわる、わかきよ

〔復元形〕

一　知念おわる　若子
　畏めさよ
　船越こまらや
又　崎に　おわる　若子
　畏めさよ
　船越こまらや

〔逐語訳・大意〕

1．知念にいらっしゃる若子は<畏れ多いことよ。船越コマラは>

2．崎にいらっしゃる若子は<畏れ多いことよ。船越コマラは>

知念にいらっしゃる若子は、崎にいらっしゃる若子は、「ああ、船越コマラの畏れ多いことよ」、と訳できる。本来は長いオモロの冒頭部のみが残ったものとみられる。

〔語　釈〕

ちゑねん—知念。知念村とみるのが一般的だろうが、あるいは『辞典』が古謡の例を引いて説く、玉城間切前川村にあった古い部落名かと思われる。前者については『おもろさうし』巻19が「知念・佐敷・玻名城のおもろ」であり、用例が巻19に集中してあらわれる。後者で考えると、他に知念トーバルの原名が玉城村にあり、島中オモロとしては分かりが良い。

わかきよ—若子。「按司・王・貴人の美称。『わかいこ』に同じ。オモロ原注に『人名也』とあるが、人名ではなく、若い人、の意」（『辞典』）。「わかいきよもいあちおそい」（12-654）は明瞭に王を指している。用例は本例とその重複

NII-Electronic Library Service

Okinawa Prefectural University of Arts

オモロ17-1248の他に10-549、13-789・919)。「わかきよもい」(4-170、21-1474)、「くてけんのわかきよ」(19-1301)、「くにたかわかきう」(13-810)、「わかいきよ」(9-481、他7例)その他の語形がある。

やぐめさ—畏れ多い。貴い存在(神・貴人)の傍に居る時の心情とされる。オモロ原注に「恐敬斟酌する事」(10-537)などとある他、『混集』(坤、言語)にも「やくめさ　おそるゝと云事」、『同書』(乾、言語)に「おやむめさたうと　恐憚り尊ふ事也」などとある。宮古の神歌に「やぐみうぷかん」(恐れ多い大神)などの形で頻出する。沖縄方言でいうウェンミサ(降参する。ご免なさい)もこの語と関わるか。

ふなこしこまら—船越コマラ。船越は玉城村船越。『辞典』は「籠もる」の未然形とみて「籠もるだろうよ」とする。そうであれば「船越に籠もるだろうよ」、あるいは「船越に籠もろうよ」となる。ところで「こまら」は人名とはみられないか。宮古の説話に人名「こまらはい」が出てくる。法術師の名である(『平良市史』第三巻　資料編1　前近代　1981年　平良市役所　59頁)。なお、重複オモロは「こましや」となっている。「こましや」をそのまま解釈すれば「細さ」で、精密である、上手であるの意。「船越の細かい(精しい)ことよ」となり、船越への讃辞となる。「こまさ」の例は13-750「楫取(かぢと)たる　こまさよ」とみえる。

さき—崎。「さきよだ」(崎枝)の略形か。「さき」の形は重複オモロとあわせて2例のみ。一般には「あいもりか〜」「いちもりか〜」「いふ〜」「うら〜」「おにの〜」「かなや〜」「はま〜」「ひやもさ〜」「ふな〜」「みや〜」「みるや〜」の形で出る。

〔鑑賞・問題点〕

知念にいらっしゃる若子は、崎にいらっしゃる若子は、とオモロの主体者とみられる人物が謡われ、反復句では「船越コマラの畏れ多いことよ」と、別の存在が提示されているオモロと解してみたが、全体としてはどのような展開をするか不明である。ここの知念を玉城の知念原、知念トーバルあたりではないか、とみる考えもある。知念村の知念に跳ぶよりもこの方が良いだろうか。

「こまらや」の解釈で神女の聖地籠もりのオモロともなるし、人物・船越コマラを讃えるオモロともなるし、さらには土地・船越を讃えたオモロともなる。い

NII-Electronic Library Service

Okinawa Prefectural University of Arts

ずれの場合も知念の若子と船越の関係はいまいち不鮮明である点が気に懸かる。

18-1279

〔原　文〕

おもろねやかりかひやくさかふし

一　せしきよ、かなくすく、
　　ゆかる、かなくすく、
　　おもやげの、くすく、
　　てだが、ほこりよわちへ
又　いとかすの、ねくに、
　　たまくすく、まくに

〔復元形〕

一　せしきよ金城
　　良かる金城
　　思上げの城
　　太陽が　誇りよわちへ
又　糸数の根国
　　玉城真国
　　思上げの城
　　太陽が　誇りよわちへ

〔逐語訳・大意〕

1．せしきよ金グスク、立派な金グスクは<思い揚げのグスクは、太陽なるお方がお誇りになりまして>

2．糸数の根国に、玉城の真国に<思い揚げのグスクは、太陽なるお方がお誇りになりまして>

玉城・糸数のグスクを讃えたオモロであろう。せしきよ金グスク・立派な金グスクは糸数の根国にあって、玉城の真国にあって、ああ、思い揚げのグスクは太陽なるお方がお慶びなさっていらっしゃり、というもの。

〔語　釈〕

せしきよ—未詳語。「かなぐすく」の美称であろうが、語義は分らない。「せじきよら」（セヂ清ら）かという考えもある（『辞典』）。しかし、オモロではセジは「せち」と書かれ、「せし」の例はこれ以外にはない。用例は本オモロと次オモロのみ。

かなくすく—金グスク。グスクの美称。「知花～」「摩文仁～」「伊祖の～」などがある。「せしきよ～」「ゆ（世）かる～」の例は本オモロと次オモロのみ。地名としての例は「かなくすく大ちきよ」・「かなくすく、しらへきよ」(14-984)がある。

NII-Electronic Library Service

Okinawa Prefectural University of Arts

おもやげのくすく—思揚げのグスク。「おもやげ」は思い揚げで、尊く思うこと。グスクを讃美する語となるほか、マキョあるいは人の美称として使われる。「おもやげのくすく」の形は本例のみ。「おもひあげのくすく（城）」の例が14-1020・1022にある。「いちのおもやけ」（一の思揚げ。21-1395）はマキョ（古村落）の名か、あるいは神（君）の名とみられる。

〔鑑賞・問題点〕

玉城・糸数のグスクを讃美したオモロ。讃美の心は「思い揚げのグスクは　太陽が　誇りよわちへ」という語句に集約されている。

ここでは「せしきよ金城は・立派な金城は、糸数の根国に・玉城の真国に」と、金城と讃えられるグスクが玉城・糸数にあり、と展開するものと解釈したが、別解も可能であろうか。また、「太陽が　誇りよわちへ」を「地上の太陽なる按司様がお慶びになって」としたが、この場合は自分の割拠するグスクの立地や状態に十分に満足している按司の姿が彷彿とされる。これを「太陽神が祝福して」とするとどうであろうか。最高神である太陽神も祝福する目出度く立派なグスク、という意となり、その神聖さと神の加護の謡い込まれたオモロと解しうる。検討の余地はないだろうか。

18-1280

〔原　文〕

おもやけのくすくのふし

一　せしきよ、かなくすく、
　　世かる、かなくすく、
　　玉よせ、くすく、
　　てだす、世わ、ちよわれ
又　いとかすの　ねくに
　　たまくすく　まくに

〔復元形〕

一　せしきよ金城
　　良かる金城
　　玉寄せ城
　　太陽す　世わ　ちよわれ
又　糸数の根国
　　玉城真国
　　玉寄せ城
　　太陽す　世わ　ちよわれ

〔逐語訳・大意〕

1．せしきよ金グスク、立派な金グスクは〈玉を寄せるグスク、太陽なるお方様

NII-Electronic Library Service

Okinawa Prefectural University of Arts

は世にましませ＞

2．糸数の根国に、玉城の真国に＜玉を寄せるグスク、太陽なるお方様は世にましませ＞

玉城・糸数の玉寄せのグスクに割拠する按司の万歳を予祝するオモロであろう。せしきよ金グスク・立派な金グスクは糸数の根国にあって、玉城の真国にあって、ああ、玉寄せのグスクにいらっしゃる太陽なるお方様こそはこの世に末永くましますのだ、というもの。

〔語　釈〕

たまよせくすく―玉寄せ城。玉を寄せ集める立派な城。13-870には「きこゑ、みやきせん／もゝまかり、つみ、あけて／かはら、よせ、御くすく、けらへ」（名高い今帰仁は、百曲がりの石垣を積み上げて、ガーラ王を寄せる御城を造って）とある。「たまよ（世）せおうね」（玉寄せ御船。10-549＝13-810）という語例もある。いずれも玉を寄せる、集めることがどれ程重要なことであったかがわかる。用例は本例と重複オモロの２例のみ。

〔鑑賞・問題点〕

前のオモロと同一構造のオモロ。反復句が「てだす　世わ　ちよわれ」となったことで、全体のテーマがグスク讃美から按司の万歳予祝へと変化している。その意味で、オモロの反復句が一首の中で果たす役割がどのようなものであるかを明瞭に示してくれるオモロである。

「玉よせくすく　てだす　世わ　ちよわれ」を直訳すると「玉寄せグスクに、按司様はこの世にまします」であるが、これを「（せしきよ金城・立派な金城は玉城・糸数にある）この玉寄せグスクである金城にいらっしゃる按司様こそは、この世のある限りましますのだ」と解釈した。「ましますのだ」と現実的に謡うことによって、謡われた状態（按司の永遠なる君臨）が実現する、と考えるのがこのオモロの成立する基盤である。これが言霊信仰である。オモロの根本には言霊信仰があり、ことばによって構築された仮空の世界は現実世界とパラレルの関係にあり、この仮空の世界の理想的状態は、現実世界にも感応して実現するという類感呪術の考え方がある。

NII-Electronic Library Service